ISSN 1348-8139

News Letter 2014.7 No.32

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

CONTENTS

ごあいさつ …… 内田青蔵 2

研究班紹介
『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究 …… ジョン・ボチャラリ 3
19 世紀前期ヨーロッパ生活絵引研究 …… 鳥越輝昭 3
中国・朝鮮の旧日本租界 …… 大里浩秋 4
海外神社跡地のその後 …… 中島三千男 4
汽水の生活環境史 …… 安室　知 5
船上生活者の実態とその変容に関する研究 …… 田上　繁 5
インターネット・エコミュージアムのためのデータマイニングと
ユーザインターフェース等の基盤技術に関する研究 …… 木下宏揚 6
戦時下日本の大衆メディア研究 …… 安田常雄 6

租界メディア班　第 41 回研究会（2013 年度　非文字資料研究センター　第 3 回公開研究会）
東アジアの租界・居留地とメディア …… 7

2013 年度 非文字資料研究センター　第 2 回公開展示・第 4 回公開研究会
海外神社とは？　史料と写真が語るもの …… 14

研究会報告
イギリス・BICC 中国都市研究ネットワーク会議の参加報告 …… 孫　安石 22
漢陽大学校東アジア文化研究所主催国際会議
日常性へのまなざし …… 佐野賢治 24
『東アジアの租界とメディア空間』研究会
東アジアの租界とメディア空間 …… 大里浩秋・内田青蔵 26

研究調査報告
海外神社跡地から見た景観の持続と変容
台湾における営内神社等の調査 …… 坂井久能 28

研究エッセイ
紙芝居共同研究の根もとにあるもの …… 安田常雄 32

招聘研究員レポート
私の訪日収穫 …… 倪 彩 霞 34
城下町の近世武士住宅 …… Delphine Vomscheid 35
近代日本キリスト教の伝道活動と民俗的な注目 ―明治時代横浜市の考察を中心として …… 沈 梅 麗 36
日本滞在記 …… 金 羽 彬 37
青い旅路：日本の藍染についての調査とそれぞれの思い出 …… 卞 夢 薇 38
日本の外国人陶芸家たち …… Liliana Granja Pereira de Morais 39
植民地期の朝鮮の工業化と地域社会 …… 梁　知恵 40

派遣研究員レポート
中国の海洋発展政策と舟山群島新区の発展 …… 于　洋 42
バンクーバーにおける韓人（ハニン）（韓国移民者）達の食文化研究 …… 李　徳雨 43
派遣研究記 …… 譚　静 44
フランスでの現地調査を終えて …… 田中あや 45
■ 2014 年度　センター研究員・研究協力者 …… 47
■ 2014 年度　奨励研究者決定・国際常民文化研究機構刊行物紹介 …… 48
■日本常民文化研究所より …… 49
■年報 11 号のご案内 …… 50
■主な研究活動 …… 51
■ Information …… 52

ごあいさつ

内田　青蔵（非文字資料研究センター　センター長）

非文字資料研究センターは、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究成果を継承・発展させることを目的に 2008 年 4 月に創設されました。

非文字資料とは、その「“非”文字」という名称に象徴されるように、文字以外による記録、すなわち、絵画・写真・映像などの図像資料から、環境・景観に刻まれた自然災害や人的活動の痕跡、さらには匂い・味覚・身体動作など文字化されにくい様々な表現行為なども含みます。

本研究センターでは、こうしたこれまでほとんど研究対象や研究資料として扱われてこなかった非文字資料に注目し、その資料化・体系化を進め、新しい人類文化の研究の可能性を探求することを目指しています。

新研究領域としての非文字資料研究の確立・発展とともに、研究拠点としての役割の一環として、世界各地の非文字資料関連の研究センターや研究者と積極的にネットワークを構築しています。現在、本研究センターでは、中国、韓国、カナダ、ブラジル、ドイツそしてフランスを拠点とする９か所の大学・研究機関と提携し、情報交換を積極的に展開し、併せて、これらの研究機関との間で、これからの非文字資料研究を担う若手研究者の育成を目的に、相互の短期招聘ならびに派遣事業を実施しています。

本研究センターの研究活動は、研究テーマ毎に共同研究班を組織し、３年間を単位に行われ、2014 年度からは第３期が始まります。第３期では、本研究センターの基幹研究である生活絵引編纂共同研究をはじめ、これまで行われてきた共同研究の継続とともに、新たに戦時下の大衆メディアに関する共同研究を加えた８つの共同研究が開始されます。その研究成果は、今後、論文として発表し、また、公開研究会という形で議論の場を一般公開します。研究員及びスタッフ一同、非文字資料研究の拠点としてその役割を果たすべく、努力していく所存です。今後とも非文字資料研究センターへのご支援とご理解をお願い申し上げます。

研究班紹介

1.『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究

ジョン・ボチャラリ（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の第一班の仕事を引き継ぎ、『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』第 1 巻、第 2 巻の続編として第 3 巻を刊行した。

他の班の研究活動と比べ、いかにも地味な作業と見えるに違いない。日本語原文の『日本常民生活絵引』を翻訳しているだけではないか、と。しかし、地味な作業の中でそれなりの面白さと難しさが潜んでいる。

何年か前から「日本文化の発信」が課題に上がっている。どのようにして日本文化と歴史の面白さ、豊かさを日本語のできない方々に伝えるか。世界レベルの日本に関する言説の多くは英語などによるもので、日本人の「生の声」はなかなか伝わっていないように思う。日本中世への扉として『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』はきわめて面白い資料ではないであろうか。

だからといって、英訳するにあたって難しい問題がないわけではない。例えば、原文の中で現在の知識から見て納得できないところもあるが、気が付きながらも勝手に訂正するわけにもいかない。また、人物の名前などの英語表記も難しいところがある。日本語で読んだ場合では読み飛ばすかもしれないが、英語にした場合 Sanahira なのか、Masahira なのかはっきりしなければならず、人名事典などを参考することにかなり時間がかかることになる。

それはともあれ、なるべく今期中に第 4 巻と第 5 巻を刊行するよう作業を続けているところである。

研究班紹介

2. 19 世紀前期ヨーロッパ生活絵引研究

鳥越　輝昭（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

この共同研究の目的は、ヨーロッパの重要な諸都市について、19 世紀前期における生活の様子を、非文字資料を中心に分析、比較検討して、絵引を作成することである。

都市としては、ロンドン、パリ、ベルリン、ウィーン、ローマ、ヴェネツィアなどを取り上げる予定である。

19 世紀前期という時代区分は、およそフランス革命から 1870 年頃までを指している。

使用する主な資料は、この時期に作成された絵画・版画のうち、都市の建築物、広場、街路、水辺、公園などを、そこに集まる人々とともに描き出している作品である。

この研究は、建築物や広場などの様子を、ヨーロッパ横断的に比較検討することにより、共通性と相違とを浮かび上がらせ、当時のヨーロッパの生活への洞察を深めるものとなるだろう。

共同研究のメンバーと専攻は、熊谷謙介（フランス文学・表象文化論）、小松原由理（美学、前衛芸術思想史）、ステファン・ブッヘンベルゲル（比較文学、ドイツ文学、ミステリー小説・漫画の研究）、鳥越輝昭（比較文学・比較文化史）である。熊谷がフランス語圏、小松原が北ドイツ語圏、ブッヘンベルゲルが南ドイツ語圏（含オーストリア）、鳥越がイタリア語圏と英語圏とを受け持つ。

この共同研究グループは、すでに 18 世紀ヨーロッパの都市生活について絵画・版画を資料とする研究を過去 3 年間おこなってきた。今回の研究はその実績と経験とに基づくものである。

研究班紹介

3. 中国・朝鮮の旧日本租界

大里　浩秋（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

中国・朝鮮の旧日本租界研究をメインテーマにした第一期・第二期の活動において、共同研究者各自の関心に基づく調査や研究報告を行い、収集した資料も相当量に上り、取り組んだ関連テーマも多様な広がりを示している。しかし、とくに第二期では各自の研究に委ねる状況にとどまってしまった点もある。第三期ではその点を克服し、資料の整理と現況調査を継続し、これまで足を踏み入れていない沙市や東北の旧租借地や旧鉄道付属地についても調査を行い、その際、現地で日本人が発行した新聞、雑誌類についても分担して調査を行う。また、予定通りには進んでいない朝鮮の旧日本租界についても、基礎となる現地調査を行い、その上で、これまでの研究の締めくくりとなるような共同研究の成果を公刊する計画である。

『訛伝火起』「呉友如画報」上海古籍出版社、1983

研究班紹介

4. 海外神社跡地のその後

中島　三千男（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

海外神社跡地に関わる共同研究班は非文字資料研究センターの第２期目から始まったので、共同研究班としては今期が２期目となる。

神奈川大学での海外神社跡地の研究は、2003 年の 21 世紀 COE プログラムの共同研究班から始まったもので、途中の３年間の空白期間を除いても、10 年の歴史を刻もうとしている。

海外神社そのものの研究はそれ以前から長い歴史を持つが、我々が手掛けている海外神社跡地の研究、すなわち日本帝国の崩壊と共に機能を停止した海外神社の跡地が、その後どのように景観を変化させ今日に至っているのかという研究は、全く私共が新しく切り開いてきた研究課題であり、今や国内はいうまでもなくアジアを中心に世界的にも神奈川大学の名前と共に大きな注目を集めつつある。このことは、本共同研究班がアップしている海外神社のデータベースのアクセス状況を見ても明瞭であり、非文字資料研究センターは、各国・各地の海外神社研究及びその跡地研究のネットワークの結節点としての役割を果たしている。

今期の３年間においては、未調査の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）及び東南アジア（フィリピン、インドネシア）地域の調査を行うと共に、データベースを充実・完成させ、さらに、これまでの調査結果を写真集として刊行して、一応の締めくくりとしたい。

研究班紹介

5. 汽水の生活環境史

安室　知（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

本共同研究は、第１期共同研究「水辺の生活環境史」から引き続き、日本列島の沿岸域に広がる汽水域に注目し、そこに暮らす人々の生活文化を記録するとともに、「汽水文化」を提唱することを目的とする。また、その過程において、非文字資料研究としての生活環境史の手法を開拓する。

日本列島では、大河川の河口部や潟・内湾といった沿岸環境の多くは淡水と海水が入り交じる汽水域となる。そこは、従来、低湿なため人が暮らしにくい不毛の地、新田開発などにより克服されるべき悪地として位置づけられてきた。しかし、現実にはそうした地にも人が暮らし、また一見悪条件だからこそ、それを乗りこえ、また利用する民俗文化が形成されてきた。たとえば、淡水魚とともに海水魚が棲息する汽水域では独特な漁撈技術がみられるし、また水の制御がままならないからこそ、それに順応したかたちでの低湿地農耕が発達している。さらに、そこは海から河川への船荷の積み替えがおこなわれるなど、水上交通の要地ともなっている。こうした汽水域独特の文化要素を繋ぎ合わせ、日本列島の生活環境史研究として総合化し、新たな視点から「汽水文化」の解明を試みたい。

研究班紹介

6. 船上生活者の実態とその変容に関する研究

田上　繁（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

本研究は、近・現代における船上生活者の実態を追究し、その歴史的変容について考察する。江戸時代、肥前国や瀬戸内海には一年の大半を船の上で暮らす「家船（えぶね）」とよばれる船上生活者が存在した。長崎県の「大村郷村記」によれば、五島灘に面する瀬戸村では、家船 63 艘、人口 309 人がおり、かれらは三反帆ほどの船に乗り込んで鮑漁などの漁業に従事したとある。

こうした伝統や習俗は、変貌を遂げつつも近代に入っても受け継がれた。例えば、明治２年（1869）の「渋江公雄文書」（長崎県大村市）からは、明治 20 年代に瀬戸村の２家が「瀬戸家舟」であったことが確認される（写真）。

先の第二期の共同研究では、昭和 40 年代半ばごろ（1970 年前後）まで艀（はしけ）や機帆船で石炭を主とする貨物輸送に携わった北九州若松洞海湾の船上生活者の実態を解明した。第三期では、長崎県を含む横浜や瀬戸内海の船上生活者を対象に、港湾荷役や学校制度などと関連させながら、近代化の一端を担った船上生活者の性格を明らかにする。

家船の存在を示す明治期の記事

研究班紹介

7. インターネット・エコミュージアムのためのデータマイニングとユーザインタフェース等の基盤技術に関する研究

木下　宏揚（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

インターネット・エコミュージアムや只見町に開設予定の民族博物館において必要なデータマイニングやデータの入力、検索に適したユーザインタフェースなどの基盤技術を開発することを目的としている。具体的には、オントロジーを用いたデータマイニングの実際の資料に対する応用、資料のデータベースをクラウド化する際の個人情報保護と著作権管理、資料の整理とデータ入力や流通を円滑に行うためのゲーム理論や群知能などに基づく価値交換モデルの構築、資料を直感的に取り扱うことを可能とする群知能を用いた操作のコンテクストに基づくユーザインタフェースの構築などを行う。一例として、博物館資料の情報をインターネット上で公開する試みがいくつかの博物館で行われている。各博物館が持つ台帳の情報は膨大な量であり、多くの博物館にてその全てを有効に活用できていないのが現状である。そうした情報をデジタル資料として整理するとともに、インターネット上で公開する際には効率的に情報検索を行う必要がある。そこで、只見町インターネット・エコミュージアムの検索インタフェースに Ontology を用いて民具データベースを構築することで、語彙情報の増加を行い、より的確な検索を目指していく。

研究班紹介

8. 戦時下日本の大衆メディア研究

安田　常雄（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

この共同研究は、昨年「国策紙芝居」資料 241 点が非文字資料研究センターに所蔵されたことを直接の契機として計画された。近年日本近現代史研究においても、大衆文化への関心が広がりつつあるが、ここではこの「国策紙芝居」資料を中心に、戦時下日本の大衆文化の構造を検証し、戦時体制の特質を再考することを目的とする。それは同時代におけるプロパガンダの特徴の検証が一つの軸になるが、この点については「国策紙芝居」に限らず、映画・マンガ・アニメ・流行歌・写真・グラフ雑誌・ポスターなどとの関係（その接点における共通性と差異）を視野に入れながら、同時に日本本土ばかりではなく、植民地地域での実態やナチスドイツなどとの比較も含めて検討したいと考えている。具体的には、「国策紙芝居」資料 241 点の「解題」作成を進め、これを基礎に紙芝居の文化特性（たとえば実演の場所性、手渡し文化の直接性など）に即して、同時代のメディアのありかたを検証すること、また現在ほとんど不明な紙芝居作家との内在的な関係なども課題となるだろう。加えて各地における「国策紙芝居」の残存状況の調査を進め、「全国総合目録」を作成する展望も意識されている。各分野の気鋭の研究者とともに、新しい視角と方法による問題提起ができればと考えている。

租界メディア班　第 41 回研究会

（2013 年度 非文字資料研究センター 第 3 回公開研究会）

東アジアの租界・居留地とメディア

日　　時：2014 年 2 月 15 日（土）9:30 ～ 18:00
会　　場：神奈川大学横浜キャンパス　17 号館 215 室
開会挨拶：田上　繁（非文字資料研究センター長）
趣旨説明：孫　安石（非文字資料研究センター　研究員）
報　　告：①『東亜同文会資料中の租界関連情報』大里浩秋（神奈川大学）
②『大連の歴史地図の作成について』木之内誠（首都大学東京）
③『天津関係の絵はがきについて』近藤恒弘（民間収集家）
④『絵葉書から読み解くハルビンと日本人―ハルビン絵葉書の社会的意味』毛利康秀（日本大学）
⑤『従軍画家たちが描いた戦時中の上海―軍事郵便絵葉書による図版検証―』彭国躍（神奈川大学）
⑥『上海人文歴史地図の制作構想について』蘇智良（中国・上海師範大学）
⑦『租界と武漢の都市空間・機能の変容』李衛東（中国・江漢大学）
⑧『横浜居留地の建築について』内田青蔵（神奈川大学）
⑨『上海韓人の国際認識』金承郁（韓国・ソウル市立大学）
⑩『ソウルの外国人居留地の形成について』金濟正（韓国・ソウル市立大学）
コメンテーター：
栗原　純（東京女子大学）、村井寛志（神奈川大学）、中村みどり（早稲田大学）、石川照子（大妻女子大学）

①　大里浩秋「東亜同文会資料中の租界関連情報」

大里は、まず「日本は日清戦争勝利後、台湾を植民地にするとともに、中国国内にいくつかの租界を置き、その後もさまざまな機会をとらえて、各種の特権を得た」とし、「日本がとったそうした動きはイギリスをはじめとする西欧列強の 19 世紀前半からの中国進出の仕方をまねたものだが、明治時代に中国との関係を重視する日本人は、西欧列強の中国進出は侵略的であるが、日本は違う、日本は中国と連帯して西欧列強の侵略からアジアを守るのだと考え、そのつもりでいろいろ実践したはずが、その行き着く先に満州事変、「満洲国」建国、日中戦争があり、1945 年の敗戦があった」と、報告の前提となる状況認識を述べた。

その上で、戦後 60 年を経てなお本格的な租界研究が日本でなされていないことに気付き、この 10 年来数人の同僚とともに中国における旧日本租界および日本居留地について現地調査や資料調査を行ってきて、その実態について一定程度の理解を得ることが出来たが、まだ明らかにできていないところがたくさんあるとして、その不十分さを補う作業の一環として、東亜同文会の機関誌を利用して、そこに記されている開設まもなくから 11 年間の中国数か所に置かれた日本租界に関する記事を読むことで、これまでの資料調査では気付かなかった実態を少しでも明らかにできればと述べた。

ここで本題に近づき、東亜同文会の前史および創立事情について、大里が数年来解題をつけながら読んでいる「宗方小太郎日記」、さらに『近衛篤麿日記』、創立直後に発行した機関誌『東亜時論』などを取り上げながら説明し、動機はさまざまであれ中国に強い関心を持つ人々

大里浩秋氏

の集まりである東亜同文会の機関誌（『東亜時論』1898年12月～99年12月、『東亜同文会報告』99年12月～1910年6月、『支那調査報告書』10年7月～11年12月、『支那』12年1月～45年1月）は、租界関係だけとはもちろん限らないとしても、関連する情報は豊富に載っているはずだと見当をつけて読み始めたとする。そして、上記のごとく46年間月2回、あるいは1回発行した機関誌中、初期の『東亜時論』と『東亜同文会報告』から関係しそうな記事を拾ってレジュメに並べつつ簡単なコメントをする形で話を進めた。ここでは、記事を1つ1つ取り上げる余裕はないので、2機関誌を通覧しての感想のみを紹介する。

『東亜時論』が発行された時期は、各地日本租界の開設直後ないし開設準備の時期と重なるので、その時期の各地在住日本人が現地で租界開設を待ち望んでいる様子や現地住民が開設に反発している様子などが伝わる内容になっており、外務省の公式文書では読めない内容で興味を引く。下関条約で開設を認めさせた租界中、その後の進展がない蘇州、杭州、沙市の現状を伝えるとともに、日本政府の対応の悪さを批判している。また、下関条約とは関係なく開設を目指して中国側と交渉している福州、厦門、営口の状況を伝えているが、そのうち繰り返し報じている福州については、その発展は見込めないと悲観的な論調である。

『東亜同文会報告』になると、他国の租界や租借地に関する動きが取り上げられるようになり、日本租界については、定着しつつある天津、漢口については現状報告を載せるものの、振るわない租界については載ることはまれである。通覧すると、当初の2年ほどは中国数か所に置いた支部の活動を通じて会の決議（中国の保全、中国の改善など）を中国内で広めようとしたかに見えるが、東亜同文会は維新派を支持して清朝を倒す側に回っているとの疑念に付きまとわれたこともあって、順調には事が運ばず、義和団事件や唐才常事件を経て、日露戦争の勝利をきっかけにして、大部分の日本租界が不振であることも幾分かは関係して、その不振を漢州でのさまざまな特権を挽回しようとしたと思わせるものがある。

今回は、以上2つの機関誌に触れただけの中間的報告に過ぎないので、今後はこれらに続く機関誌に目を通した上で、改めて報告することにしたい。

②　木之内誠「大連の歴史地図の作成について―制作作業の実際と現状を中心に」

木之内氏は『上海歴史ガイドマップ』（1999年、

木之内誠氏

2012年増補版、大修館書店）の著者として知られている方で、今回は、その姉妹編として制作中の大連の歴史地図について、その狙いや制作中の工夫などについて報告した。

まず、これは科研費を得たプロジェクト「旧満洲地域の都市歴史文化地図シリーズ第一分冊『大連・旅順編』の制作」として取り組んでいるもので、その研究計画としては「日・中・ロシア・朝鮮半島の人々の集合的記憶の重なりせめぎ合う場所大連、その多元重層的な文化の歴史的相貌を地図の上に可視化し、この地域に対してさまざまな学問的、あるいは実際的な関心を有する人々と共有しうる、多様な時空景観的情報のプラットフォームに一端を構築するというものである」と紹介された。

作業の実際としては、2010年以来実地調査を繰り返し行い、各種の文献や画像データを集め、大連に住んだことのある日本人にインタビューをして、予定地域の3分の2程度の作図が終わった段階である。建造時期の新旧によって、租借地時期以来の現存建造物、1945～1990年代半ば、改革開放期以後に3区分して色分けをする、坂の街大連の特徴を生かすべく地形の起伏を表現する、詳細でリアルな3D的ビジュアライズと文字情報を読みやすさの調整などに心を砕いていると説明された。

他に、最近の調査で満鉄総裁星ヶ浦別邸や『聊斎志異』の訳者と知られる柴田天馬の住居を探し当てたとして、そのいきさつを楽しそうに紹介した。なお、木之内氏は前日の大雪で交通がストップしたため到着が大幅に遅れて最後の報告者となったが、予定時間を超過して熱弁を振るわれたのが印象に残った。

③　近藤恒弘「天津関係の絵はがきについて」

近藤氏は、長年収集してこられた天津関係の諸資料（絵葉書、地図、写真集、案内書、回顧録その他）を、昨年（2013年）非文字資料研究センターに寄贈してくださ

近藤恒弘氏

った。とくに絵葉書は、天津に日本租界を置いて数年後の1900年代初めのものから、日中戦争時期までのものまで、1000枚をゆうに超える数であり、近藤氏のご指導の下、絵葉書中に記された文字を中心にデータを入力して、今後の活用に役立てようと考えたが、まだ整理が満足のいくものにはなっていない。これからも近藤氏のアドバイスを得て、もっと見やすい形になるよう整理に努めて、皆さんに見ていただけるようにしたいと思う。

近藤氏の報告は、1929年に天津で生まれ、天津日本中学校4年の時に終戦となり、翌1946年に日本に引き上げたというご自分の紹介から始まった。その後中学の同級会を毎年開いてきて、2002年には天津で開こうという話になったという。その際、近藤氏が幹事になり、天津行きのガイドブックを作ろうと思いついて、天津に関わる資料を集めたのがきっかけで、その後12年間集めてきたものが相当数になった。そして、私たちのところに寄贈することを思い立ったのだという。

最初は天津と名のつくものを片っ端から集めたけれども、そのうち、とくに絵葉書についてはそれぞれの違いに気付くようになり、分類の仕方もわかってきた。そのための基礎になる知識としては、絵葉書の使用開始年が国によって異なり、日本の場合は1900年から使われたし、絵葉書に通信欄が設けられるのは、1907年であったということである。さらに、日本では当初通信欄は3分の1だったのが、18年からは2分の1になった。また絵葉書中の道路や建造物の状態によって年代を判断する事もできるし、発行所が用いた文字の色や図柄によっても年代の違いを知る事ができる等である。

天津に生まれ育ち、帰国後も天津に愛着を感じて資料を収集してこられた近藤氏に、天津理解の極意を伺ったことになる。（以上、大里浩秋記）

④　毛利康秀「絵葉書から読み解くハルビンと日本人」

日本大学で構築したアジア歴史資料デジタルアーカイ

公開研究会の様子1

毛利康秀氏

ブ「ハルビン絵葉書」を利用して、戦前期のハルビンにおける日本人の観光について、メディア論の視点から報告が行われた。絵葉書の起源は1870年代のドイツに発するとされ、日本では1900年10月から絵葉書の使用が認められるようになり、解禁後ほどなくブームとなった。日本における絵葉書は、日露戦争の勝利を周知させる目的で発行されたものが人気を呼び、その収集熱が流行現象になったという。

写真絵葉書は、国際宣伝的な効果以外に、様々な出来事を報じるニュース媒体としての機能を持っていた。一方で、特定の差出人から特定の受取人へと情報が伝えられ、なおかつマス・メディアとしての画像情報に私信としての情報が付け加えられるという点において、パーソナル・メディアとしての機能をも備えていた。報告では、絵葉書の持つこうした側面は、現代人がカメラ付き携帯で撮った写真をメールで送信する「写メ」とも通じるものがあるとされた。

報告者の毛利氏は必ずしも歴史社会学、あるいはハルビン、満州に関心の重点を置いて研究してきたというわけではないということで、事象の掘り下げに課題も感じたが、一方で、絵葉書をメディアとして捉えるという視点は重要であり、ワークショップの中でも特色のある一本であった。

なお、本報告で扱われたデータの元となったという日本大学の「ハルビン絵葉書」のアーカイブはウェブ上で公開されている。「解説」によれば、同アーカイブは戦前期発行のハルビン関連の絵葉書 1177 件をデータベースとして登録したもので、絵葉書が包含する諸情報（被写体情報、記載文字情報、切手等の貼附資料情報、等々）が、戦前期および現在のハルビン市街地図情報にリンクさせたビュアーから検索できるようになっている。同じく画像資料のデータベース構築を行っている本センターにとっても参考になると思われる。

⑤　彭国躍「従軍画家たちが描いた戦時中の上海―軍事郵便絵葉書による図版検証―」

彭国躍氏

第二次世界大戦中、中国大陸や東南アジアに多くの従軍画家が送り込まれた。彭氏の報告は、氏がこれまで収集してきた軍事郵便絵葉書を手がかりに、戦後の非難と責任追及を経て、封印・忘却されてきた彼らの活動を明らかにする試みである。

報告では、各種資料との比較により、戦時中の従軍画家の作品の全貌を窺う上で軍事郵便絵葉書が持つ意味が示された。具体的な作品の分析に際しては、以下の３点の問題意識が提示された。①従軍活動の実態解明：どの画家が、いつ頃、上海に従軍していたのか、②図版内容の把握：画家たちは、どのような絵を描いていたのか、③表現意図の抽出：プロパガンダの要素と個人の創作意図がどう表現されていたのか。

こうした問題意識に基づき、51 点の作品について、画家 23 名の作品が作家ごとに整理され、更に、それらを（1）日常風景（12 枚）、（2）戦闘（15 枚）、（3）戦跡（15 枚）、（4）占領（9 枚）の４つの主題に分類し、考察が行われた。

従軍画家の作品について、戦時中から「戦争の生々しい現実を伝えるものではなく、大陸風景、戦跡の写生図の類であった」との評価があったが、本報告の考察により、日中戦争の時に上海に従軍していた画家たちが、実際には長閑な日常風景や激しい戦闘、戦跡の記録図版など、多様な作品を描いていたことが示された。

図１　小早川篤四郎「上海」（彭氏所蔵）

いまだ十分に明らかにされているとはいえない従軍画家の活動やその作品について明らかにする上で、絵葉書という資料の持つ意義の大きさを教えてくれる報告であった。

⑥　蘇智良「上海の歴史地図制作プロジェクトについて」

報告者の蘇氏は事情により来日できず、以下は報告原稿に基づいた紹介である。

現在、ある都市や地域の歴史地理学的な情報をウェブ上などで再構築したアーカイブの作成が、世界的に流行となっているが、そのような試みが上海でも進行中であるという。

それは、上海の外環線以内の都心地域を対象として設定し、2009 年までに刊行された様々な出版物から上海の歴史に関連する情報を収集、検証、分類し、データベース化したものだという。その中間報告として、『上海城市人文地図集』（『上海歴史人文地図』？）が刊行され、最終的にはデジタル地図を公開する計画があるという。

その他にも、辛亥革命など、特定のテーマに焦点を当てた歴史地図や、著名人の旧居に関わる地図情報の整理、ハンガリー人の建築家ラズロ・ヒューデックの建築についての『上海鄔達克建築地図』作成の計画があるという（2013 年に同済大学出版社から出版予定）。

上海の人文歴史情報を地図上に落としていこうという試みは、すでにある程度蓄積が進んでいる。原稿中でも言及されていた、日本の木之内誠氏による『上海歴史ガイドマップ』や、フランスのクリスチャン・アンリオ氏を中心としたウェブ上のアーカイブ *Virtual Shanghai* 以外にも、上海故事会文化伝媒有限公司・上海錦繡文章出版社から出されている「上海的外国文化地図」シリーズ（日本、ユダヤ、フランス、ロシア、アメリカ、韓国、ドイツ、イギリス版が出版されている）などがある。これらの成果を踏まえつつ、上海におけるプロジェクトが独創的なものとして発展していくことが期待される。

（以上、村井寛志記）

⑦　李衛東「租界と武漢の都市空間・機能の変遷」

李衛東氏

李氏の報告は、武漢における都市形成の誕生の様子から始まり、その自然発生的な歴史性に 1861 年以降の欧米列強の租界開設を契機に展開された近代化を受け入れる素地が存在していたこと、現在、華中地区の発展における武漢の役割がさらに重要性を帯びていることを指摘した。以下、概要を記す。

武漢の都市空間は歴史上「双城」から「三鎮」への変遷を辿ったといわれるという。3500 年前の商の時代、武漢地区には早くも「盤龍城」とよばれた古代都市としての城市が出現していた。そこでは青銅器の軍事関連の文物も出土していることから、商王朝の南方における青銅文化の中心であり、統治の中心であったことが窺えるという。ここに拓かれた「盤龍城」の建設目的は、南方の少数民族の制圧と付近の豊富な鉱物資源の確保にあったと思われる。

一方、こうした高度な文化の発達した地域であったはずの「盤龍城」の歴史的記録は忽然と姿を消し、再び、武漢地域が歴史に登場することになるのは、東漢時代末期に「却月城」と「魯山城」が建立された時であったという。この軍事拠点としての２つの城郭都市の存在が、武漢を「双城」と呼ぶ所以である。戦乱のなかで建立された２つの城郭都市は、小規模ではあったが、軍事上の要塞（城郭）をなしていた。これは武漢一帯が政治、軍事、文化の中心になりつつあったことを意味していると考えられるという。

また、武漢に「双城」が形成された同じ時期には、一種の「市」（市場、市街）という形態を備えた街も出現した。「南浦市」、「霊泉古市」などの城市が形成されたのち、明・清の時代になると、漢口に典型的な「市」（市場、市街）が大いに発展し、武漢は商・工業が繁栄した天下の四大鎮（朱仙、景徳、仏山鎮、武漢）のひとつとして数えられていたのである。

前近代の武漢では、「城」は都市発展の中心であり、「市」の形成は計画的に建設されたというよりは、商業発展がもたらした結果ということができるという。そのため、明・清以来の商業的発展を背景に商業都市として成長した漢口は、「市」の発展から生まれた典型的な商業都市であり、漢口の発展は政治的な意図とはまったく無関係なものであったという。そうした独自の内的発展を遂げた商業都市としての漢口は、1861 年の開港という新時代に対しても適応できる能力を十分備えていたという。

1861 年の武漢の対外開放以降、西欧列強は相次いで租界を創設した。こうした西欧列強による租界の設立は、武漢の社会、政治、経済、文化などあらゆる方面に劇的な変化をもたらし、その結果、武漢の都市空間は急激な変貌を遂げることになった。すなわち、租界設立の以前、漢口は河（漢水）に面した都市であったが、租界の設立によって大型の船舶が行き来する長江沿いの開発が急激に進み、租界が置かれた長江が急激な発展を成し遂げたのである。この租界地区に新たに開発された都市は、伝統的な中国社会における都市発展とはまったく異なるものであったし、租界地区の発展により旧市街地の商業発展は急速に衰え、また、没落することになった。いずれにせよ、開港と租界の設立は、まさに武漢を国際的な都市へと発展させ、交通と通信技術は武漢の地理空間をも大きく変えた。すなわち、租界は、武漢を世界へとつなぐ役割を果たしたのである。その結果、中国の内陸の都市でしかなかった武漢は、国際都市へと大転換を成し遂げ、国内貿易を中心とした産業構造から今や世界を舞台にした国際的な貿易都市へと成長できた。すなわち、領事機構、外国人の商社（洋行）、税関機能を併せ持つ租界を、新しい都市の発展モデルとし、武漢は急速に近代化を進めることができたのである。その意味で、武漢の近代化は、租界によってもたらされたともいえる。そして、現在、長江中流地区における武漢の役割はもちろんのこと、華中地区全体の発展を牽引する都市としての役割が益々強く求められているのである。

⑧　内田青蔵「横浜居留地の建築について―日本大通りに見られる官庁建築の集中化について―」

内田青蔵氏

内田報告は、2013 年 12 月の研究会における発表内容を基に、官庁建築の集中化の動きを中心に紹介したものであった。その内容は、研究会報告に譲ることとする。

（以上、内田青蔵記）

公開研究会の様子２

⑨　金承郁「上海韓人の国際認識」

金承郁氏

金氏の報告は、従来の上海朝鮮人研究が、主に上海の韓国臨時政府を中心とした独立運動の研究であったという反省から、韓国人が移住したその他の地域との比較検討を提案し、また、当時、上海に滞在していた朝鮮人がどのような国際認識をもっていたのか、を紹介するものであった。

その分析によれば、19 世紀の後半から 1930 年代に至るまでの、いわゆる初期の韓国人の移民の主導権は、韓国の独立運動家が握っていたが、その居住空間と 1930 年代の虹口を中心とする韓国人の居住空間は全く異質的なものであったという。そして、この初期の韓国人居住者は、朝鮮半島から上海へ渡航するという直接ルートではなく、その多くが中国の東北地域を経由する迂回路を辿っていたことを指摘した。この初期の上海滞在を経験した韓国の人々の国際認識は、当時の朝鮮で発行された雑誌『開闢』、『三千里』などに紹介されており、その中の一部は、（1）国際都市上海を世界の縮図として理解し、（2）国際情勢の変化に韓国人が積極的に対応していかなければならない、という認識が表明されていることを紹介している。

また、帝国主義列強の侵略と競争という構図の中で、上海が経験する社会文化現象は、中国だけではなく、東アジア諸国にも影響を及ぼす重要な経験になる、という意見が当時から提示されていたと話す。当時の韓国人は、上海が光明の都市であると同時に、暗黒の都市であるという両面性をもっていたことにも触れ、たとえば、フランス租界で開催されたフランス革命記念日の本質は、自由、平等、博愛を声高に叫びながら、その一方で中国人を騙して巨額の富をなし、豪遊するフランス人がいることを忘れてはならないとも指摘している。

⑩　金濟正「ソウルの外国人居留地の形成について」

金濟正氏

金濟正氏の報告は、朝鮮王朝末期から 1945 年にいたるまでのソウルの政治と権力の中心が、どのような歴史的変遷を辿ったのかを後付けしたものであった。それによれば、欧米との外交接触を始めた朝鮮時代の後期（1880 年代）には多くの外国公館が設置された貞洞こそが政治の中心であった。ところが、1890 年代に入ると、朝鮮における利権の獲得に乗り出した日本の攻勢を

栗原純氏

村井寛志氏

中村みどり氏

石川照子氏

かわすために、朝鮮政府がロシア側に庇護を求めたことで、政治の中心はロシア公使館へと移動した（韓国では「俄館播遷」といわれる）。その後、1906 年に日本と朝

孫安石氏

鮮王朝との間でいわゆる統監府が設置されることにより、日本人居留地が多く居住する南山が権力の中心として浮上した。ところが、1910 年に日本が朝鮮を植民地として併合したことから、朝鮮総督府は植民地の民衆に圧倒的な力の差を見せびらかすためにより大きな建築物を建造する必要性に迫られることになる。ここで登場したのが、朝鮮総督府の新築計画であり、最終的には朝鮮王朝の王宮が位置した景福宮の一部が朝鮮総督府の庁舎として当てられ、1926 年にはその完成をみることになった。

このようなソウルの事例を、アジアと世界の植民都市と比べたときに、1 つ興味深い事実を発見できる。すなわち、世界的な規模で展開された植民都市は多くの場合、「土着と外来」、「伝統と近代」という 2 つのシンボルを対比するために新しい都市を建設する場合が多かったが、日本の場合は、台北の台湾総督府にしても、ソウルの朝鮮総督府にしても、日本人居留民が多く居住する街の中心に権力と政治の中心を設置したという。台北の場合、台湾総督府の関連建築物の多くがいま現在でも権力の中心として機能しているのとは対照的に、ソウルの場合は最終的に撤去される歴史的な経緯を辿ったが、この「撤去」という意味からみれば、ソウルの事例が特殊なのかも知れない。

この 2 つの報告を聞いて私が感じたことは、これらの報告が都市の「空間」を問題視し、都市がどのような機能を担ったのかについて問題関心を設定していたという点であった。これは 2 人の報告者が所属したソウル市立大学が「都市人文学」（ニューズレター「非文字資料研究」No.31、2014 年 1 月 31 日刊行の第 1 回アジア都市フォーラム「アジア都市研究：回顧と展望」を参照）の創出を目指す試みが反映されていると同時に、これらの成果に「時間」という座標軸をクロスさせるという新たな研究手法を模索する試みであることも強く印象づけるものであった。（以上、孫安石記）

2013年度
非文字資料研究センター　**第２回公開展示**

海外神社とは？　史料と写真が語るもの

期　　間：2014年３月25日（火）～３月30日（日）
会　　場：サブウェイギャラリーM

2013年度
非文字資料研究センター　**第４回公開研究会**

海外神社とは？　史料と写真が語るもの　―台湾と韓国の事例を中心に―

日　　時：2014年３月29日（土）　13:00～17:00
会　　場：神奈川大学みなとみらいエクステンションセンター <KUポートスクエア >
開会挨拶：田上　繁（非文字資料研究センター長）
趣旨説明：津田　良樹（非文字資料研究センター　研究員）
報　　告：黄　士　娟（国立台北芸術大学　副教授）
　　津田　良樹（非文字資料研究センター　研究員）
　　諸葛　衍（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士前期課程）
　　林　承　緯（国立台北芸術大学　副教授）
司会・進行：中島　三千男（非文字資料研究センター　研究員）

公開展示・公開研究会『海外神社とは？史料と写真が語るもの』について

津田良樹

戦前期に大日本帝国が海外において植民地化した旧台湾・旧朝鮮・旧樺太・旧南洋群島や旧満州国を中心とした中国などの侵略地に日本人は神社を創設した。それらが海外神社である。敗戦とともにほとんどの神社は現地人や日本人自身の手によって破却され、その機能はすべての神社で停止した。その上、海外神社に関する公文書など関係資料類は内地においても、現地においても、日本人および現地人によって意図的に廃棄された場合が多く、そのため、海外神社の様相をますます見えにくくしている。

神奈川大学非文字資料研究センターの共同研究「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」は３年間をひと区切りとした共同研究であり、その最終年度の総括として、『海外神社とは？　史料と写真が語るもの』との共通の表題で、公開展示・公開研究会を実施した。

公開展示の様子１

津田良樹氏

公開展示

公開展示は、地域別に「東南アジア」・「南洋群島：北マリアナ諸島・パラオ共和国等」・「台湾」・「朝鮮：韓国・朝鮮」・「満洲：中国東北部」・「関東洲：中国東北部」・「中華民国：中国」・「樺太：サハリン」の８つの地域に分け、古写真・絵葉書・絵画資料・図面などをもとに各地の神社の神社時代の実像に迫るとともに、神社跡地の戦後写真などを対比的に展示することによって神社跡地の景観変容についても考える企画であった。展示は以下の３本柱で構成されていた。すなわち、「①資料の壁面展示、②プロジェクターによるプレゼンテーション、③稲宮康人氏による写真展」である。

①資料の壁面展示では、壁面の都合上、各地域における特徴的な事例に絞り込み、その事例について詳細な展示を行った。たとえば、台湾においては昭和造替を中心とした台湾神社（神宮）や神社時代の様相を色濃く残す嘉義神社など、朝鮮においては海外神社の中でも別格の地位にあった朝鮮神宮や神社時代の本殿を韓国で唯一残す小鹿島神社など、満洲においては満州国の靖国神社に相当する建国忠霊廟などに絞るという如くである。このように特徴的な事例に絞り込んだため、それ以外の神社については紹介できなかった。それを補完するために、その他の多くの神社の古絵葉書を葉書大の画像にして、それらをつなぎ合わせた帯で展示全体を貫き統一感を持たせるとともに、できるだけ多くの神社を紹介することにした。

②プロジェクターによるプレゼンテーションでは、資料展示においては壁面の制約から事例を絞り込んだため割愛せざるを得なかった現地調査済みの事例を極力収録することにして、それらについて神社時代の画像と戦後跡地の写真を交互に拡大投影し、両時代の景観の持続と変容を瞬時に体感できるような展示とした。また満洲国建国神廟および台湾神社の立体的復原動画を混えることによって、さらにイメージを膨らませ、理解を助けるように努めた。

③研究協力者である稲宮康人氏による写真展では、昨年度実施した写真展に新たに撮影した南洋群島の都洛神社や関東洲の関東神宮などの写真を追加し、国内神社は省き海外神社に絞って再構成しなおしたもので、カメラマンの眼を通して見た海外神社跡地の景観についての写真展とした。

特徴的な展示としては以下のようなものがあげられよう。奈良の宮大工であった仲　徳治郎氏旧蔵の図面の中から中国（当時の中華民国）に造営された「南京神社」・「徐州神社」や朝鮮に造営された「原州神社」の設計図

公開展示の様子２

公開展示の様子３

を仲家から借用し展示することができた。また、辻子コレクションに含まれる大型図版で鳥瞰的に詳細に神社の様子を描いた「官幣大社台湾神社境内之図」や「朝鮮神宮全景図」は原図を添えて実物大で展示した。さらに、池宮城晃氏からは、戦後、中国の軍施設となりベールに包まれていた関東神宮跡地を撮影した写真が提供された。関東神宮跡地の様相については、戦後はじめての公開となった。以上のような公開展示の内容については、事後にはなったが、記録の意味も含めて 2014 年度中に図録として刊行する予定にしている。

公開研究会

公開研究会は、中島三千男氏（非文字資料研究センター研究員）の司会のもと、台湾の事例を中心として３名、朝鮮の朝鮮神宮を事例とした１名の報告があった。それぞれの内容は下記のようなものである。

黄士娟氏（国立台北芸術大学副教授）は、「台湾の神社とその跡地について」の題目のもと、台湾へ神社が侵出した戦前期を初期（1895 年 - 大正初期）、中期（大正初期 -1931 年満州事変）、後期（1931 年満州事変 -1945 年植民地統治終結）に分けて分析し、戦後の変容過程を、神社跡地の用途変更期（1945-1964 年）、中華文化的観光を目的とした改築期（1964-1985 年）、神社の文化財指定期（1985 年桃園神社事件 - 現在）として解釈し、これらは時間の推移にともなう社会・政治の変化の現れであるとされた。戦前期については「縣社開山神社造営計画図」・「阿里山及阿里山寺境内附近計画図」や阿緱神社・宜蘭神社などの設計図など新出の造営関係図面を駆使したものであり、戦後については芝山岩の登記簿謄本や 1960 年頃に調べられた神社調査資料を紹介されながらの説明で、極めて説得力のある報告であった（本ニューズレター別稿および共同研究成果報告書『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』所収論文参照）。

津田良樹（非文字資料研究センター研究員）は、「台湾神宮の消長と地下神殿」の題目のもと、台湾神社の台湾神宮への改称・増祀、航空機事故による新社殿への遷座・造替の頓挫、そして神宮の終焉に至る台湾神社（神宮）の消長、さらに従来の神社跡地および神宮遷座予定地について古写真や空中写真などをもとに跡地・予定地の戦後の変容について報告した。また、台湾神宮・新化神社・満州国建国神廟・南京神社などに残る地下神殿の諸相についても検討した（共同研究成果報告書『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』所収論文参照）。

諸葛衍氏（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士前期課程）は、「解放後の朝鮮神宮の解体とその跡地利用について」の題目のもと、敗戦直後のアメリカの軍政統治が始まるまでの３週間ほどの間に（「権力の空白期」）、朝鮮神宮の社殿は日本人によって解体されたこと。朝鮮神宮跡地すなわち南山は韓国人にとって特別な象徴的意味を持つ地であるため、その後も、時の政権により、さまざまな形で政治的に利用・改変されてきたこと。すなわち、キリスト教関係施設建設、大統領銅像の建設と議事堂工事着手へ、議事堂工事を中止し南山公園化、安重根記念館建設、南山城郭復元というような変遷・経過があるなどの報告がされた。戦後の朝鮮神宮跡地の変容過程を、戦後韓国がたどった政治的・社会的背景と関連させながら分析したもので、海外神社研究に新たな視点を持ち込んだものとして評価されよう（本ニューズレターの別稿参照）。

林承緯氏（国立台北芸術大学副教授）は、「戦後台湾における神社建築の処理政策と金瓜石神社の再利用計画について」の題目のもと、戦後台湾における神社建築の処分政策について、接収した神社遺産を社会救済・公益のために改造利用した時期、石材など廃物利用を前提とした転用期、日台国交断絶後の大規模破壊期に分けて分析された。さらに近年には、文化財保護意識が高まるとともに、神社建築が文化財に指定されるようになり、一歩進めて金瓜石神社では宗教ぬきのお祭りや樽神輿など無形文化も含めて復元・再利用まで行っているとの報告があった（本ニューズレターの別稿参照）。

これらの報告をうけ活発な議論が行われた。黄報告に対しては阿里山神社の場所について、諸葛報告に対しては「皇国臣民誓之碑」の建てられた位置についての質問が出された。

津田報告に対しては「地下神殿」という用語についての意見があり、以下のような質疑応答が行われた。〇奉安殿の場合は御真影の避難場所を「御神体奉安所」と呼んでいるが、神社の場合、文献上に「地下神殿」という用語が使われている例があるのか。〇文献上では「地下神殿」とされる例は確認していないが、防空壕ではいかにも味気ないので、仮に「地下神殿」と称している。〇東京の大神社の場合は地下施設を「御宝庫」と呼んでいた事例があり、それは図面で確認できる。〇南洋神社では「非常特別神殿」と呼ばれている。文献上には「地下神殿」という用語は確認していないが、御神体奉遷後も元の社殿で従来通り祭祀が行われるよう配慮して造られた地下施設であることからみて「地下神殿」と称してもよいのではないかと考えている。

林報告については神社遺構を多く残す背景となる台湾人の精神・心理がいかなるものであるのかについての質問が出され、また金瓜石神社の復元・再利用に関しては、その是非を巡って熱い議論が戦わされた。主な質疑応答は以下の通りである。〇台湾においては神社が破壊されてはいるが、徹底的に壊されてはおらず、それどころか再利用も図られている。その台湾人の心理はいかなるものであるのか。〇戦後入ってきた外省人は神社のことは直接知らないが、日本のものは即、日本帝国主義の産物とみている。一方、内省人は神道を信仰しているわけではないが、少なくとも敵対するものではないという心理が強いのではないかと思われる。〇宗教を背景としてかつて行われた祭りを、宗教性とは無関係に復元という名の下に新たに再現していくことは、フィールドワーカーである研究者が踏み込んではいけない領域ではないか。また、新たな再現が事後に影響を与える危険があると思われる。にもかかわらず祭りの再現に積極的に取り組む意義についてどのように考えているのか。〇当時の祭りを再現するよりも、集落の 100 年前の歴史イメージを工夫してイベント化することに町おこしの一つの可能性があるのではないかと考えている。このような再現のやり方自体の是非も含めて問題提起としての報告である。

そのほか、海外神社研究や今回の研究会の総括および今後の展望などに関する発言もあった。おもな意見は以下の通りである。

〇従来、海外神社研究は植民地における神社政策単色に描かれてきたが、地域、時代によって微細な違いがある。そのように多様な側面があり、その多様性をどのようにまとめていくかが今後の課題であろう。

〇戦後神社跡地の変遷をたどる場合、敗戦まもなくの緊迫した時期や国民国家形成期と政治が大きな要因となる時期があった。ところがある時期から文化財保護や博物館が大きな関心となる、すなわち商業主義・資本の問題が大きな要因となる時期があると思われる。跡地利用の文脈のなかでも二つの要因が影響を与えていくというような大きな流れで論じてはどうか。

〇従来、神社研究は植民地の侵略戦争における心の支配という視点からのみ論じられてきた。台湾における、政治支配や植民地化問題を棚上げした神社の観光資源化・文化財化の現状は驚くばかりである。とはいえ、韓国・旧満洲（中国東北部）などの地域では観光化の歴史は台湾とは異なっているであろう、それぞれの地域の民族性や歴史性の蓄積の差が反映すると思われる。それぞれの地域における観光資源化の諸段階を考えてみる必要があるのではないだろうか。

〇海外神社の具体的姿を見ればみるほどに海外神社がいかに多様かということが判明し、一律に海外神社ということで一括りにはできないものであることがわかる。一方、海外神社が多様であるということが出発点であるにもかかわらず、国内の神道がたどったのと同様に、海外神社もまた極めて短期間に画一化して行く現実がある。そのことは、日本国内の神社のあり方にもどこかで跳ね返ってくるものである。植民地支配を行った者は、植民地支配を行ったことによって自分の側に跳ね返ってくるものがあるという視点が海外神社研究のなかにも必要ではないかと考える。

いずれにせよ、私からみれば日本人の負の遺産とも思える海外神社が、台湾の文化財や観光資源となり、台湾人の手によって宗教とは無関係にお祭りや神輿の再現が図られ、ゆくゆくは世界遺産登録までも視野にいれているという現実を聞くにおよび、ついにここまで来たかと

中島三千男氏

全体討論の様子

の思いを禁じ得なかった。

台湾の神社とその跡地について

黃 士 娟

黃 士 娟氏

台湾における日本時代に数多くの神社が建てられていたが、戦後には多くの神社が取り壊され、あるいは改築がなされるなどの状況に直面した。一部の神社は部分的に保存され、さらには文化財になるケースもあるが、それらは僅かなものに過ぎない。これは台湾における時間の推移に伴う、社会と政治の変化の表れであると理解している。ここでは、戦後から現在に至るまで約 70 年間における神社跡地を 3 つの時期に分けて述べる。

1 各地方の需要による用途の変更(1945 年～1964 年)

1.神社の撤去

1959 年に行われた台湾宗教の調査文献によると、1945 年から各地の神社は撤去される運命に直面する。例えば芝山岩神社は 1945 年に撤去され、芝山公園に改められた。大湖底神社も 1945 年に、角板神社は 1948 年に撤去されるなど撤去ブームとなった。

2.忠烈祠としての使用

1946 年台湾各地で忠烈祠（戦没した英霊を祀る寺）を建てるブームが始まった。多くの場合、神社を転用・改築して用いている。例えば台湾最初の忠烈祠（新竹忠烈祠）の前身は桃園神社であった。日本の総理大臣岸信介が参拝した圓山忠烈祠の前身も台湾護国神社である。台南忠烈祠、花蓮忠烈祠、基隆忠烈祠、宜蘭忠烈祠などは、神社にある鳥居、狛犬、石灯籠、参道が多く残されている。

3.その他

台湾宗教調査の文献によると、林内神社は、戦後間もなく林内公園に改められたが、社務所と宿舎は、斗六大圳水利委員会の事務所と宿舎として使用されるようになった。当時の調査図面によると、本殿、拝殿、社務所、宿舎、手水舎は残されていた。また、1960 年に発行された観光雑誌によると、旗山神社は旗山公園に改められたが、建物は取り壊されることなく使用され続けている。

写真 1　圓山ホテルのプール（1958、『台湾画刊』所収）

最も注目すべきなのは、圓山ホテルである。古地図と比較対照して見ると、1952 年の一期工事の際には台湾神社の敷地を利用し、ホテル本館を神社の拝殿の位置に建て、金竜ホールを本殿の位置に建て、社務所と神饌所間の広場はプールとし、鳥居の外側はテニスコートにした。

2 観光のための改築（1964 年～ 1985 年）

1961 年、台南市の「台南市名勝古蹟整修委員会」が、歴史が深く鄭氏の遺跡である赤崁楼、安平古堡、延平郡王祠などを修築し、それによって民族精神や国民の気節を高めることができた。これは、我が国の観光事業の政策に協力し、国際的な友誼を増進し、文化交流できるようになることが目標であった。

「台南市名勝古蹟整修委員会」のメンバーである成功大学建築学科の賀陳詞教授は、設計を委任されていた。賀教授は開山神社について、延平郡王は漢民族のヒーローであるので、ローカルな様式は彼の偉大性に相応しくなく、中国の正統を代表する北方宮殿様式に改築にすべきであるとして、この考えを基にデザインし 1964 年延平郡王祠に改めた。

1.忠烈祠を北方宮殿様式に改築

戦後、忠烈祠は多く日本時代の神社を転用していた。台湾護国神社であった国民忠烈祠は神社の改築を試みた最初の例であるが、1969 年の完成後、これが各地の神社の改築の手本となった。

2.政府行政命令で神社の取り払い

1972 年の日本との断交を機に、1974 年に内政部から「台湾における日本統治時代に作られた日本帝国主義の優越感を表現している記念遺跡の撤去要点」を公布し、行政命令として神社を撤去することになった。命令の第一条では日本神社の遺跡を徹底的に取り壊すと明記したので、それまで残っていた各地の多くの神社は撤去された。

3 神社を文化財に指定（1985 年～今日）

1.桃園神社事件

1985 年、桃園県政府は桃園神社の忠烈祠の改築計画を立てコンペまで行ったが、それが社会的に注目されると、神社として保存すべきとの声が浮上し、最終的に 1987 年に修復工事が竣工され、保存されることになった。敷地に設置している記念碑には、「この建物は現在台湾に僅かに残されている、唐朝時代に似ている日本式の建物であるために、かなり珍しい建物だ」と書かれている。

2.各地の神社を文化財に指定

1987 年に戒厳令が解除されたことで台湾史の研究は盛んになり、1990 年以後、日本時代に建てられた建物は、相次いで文化財に指定され、1998 年にピークに達した。1985 年に保存された桃園神社も 1994 年に県文化財に指定され、各地方に残された神社の遺構も指定あるいは登録されつつある。このことは台湾社会において神社に対する見方が変わってきた証でもある。植民地時代に建てられた帝国主義を象徴する宗教的な建築でも、時間の経過とともに台湾の歴史の一部となり、文化財と見なされて保存されるようになった。

解放後の朝鮮神宮の解体とその跡地利用について

諸葛　衍

諸葛　衍氏

写真 2　朝鮮神宮の正殿の跡地に建てられた十字架
出典：ソウル市立大学校博物館から提供

韓国のソウルの南山には、韓半島の神社や神祠の総鎮守として 1925 年 10 月 15 日に官幣大社朝鮮神宮が建てられ、1945 年 8 月 15 日の終戦まで存在していた。しかし、終戦とともに韓半島では、各地に建てられた日本の施設への放火や略奪などが起こり、神社施設もそれは免れなかった。その代表的な例が国幣小社である平壌神社の放火であると考えられる。そのような事情から朝鮮総督や朝鮮神宮は、神社の処理問題に関する会議を行い、昇神式を行うことを決定し、朝鮮神宮では終戦翌日の午後 5 時に昇神式が行われた。本報告は、韓国解放後から朴正熙政権期まで、朝鮮神宮の跡地がどのような変遷をたどってきたのかについてである。

終戦とはいえ、朝鮮総督府はその機能を維持し、米軍政統治の始まる 1945 年 9 月 8 日までその機能を果たしていた。この時期は「権力の空白期」とよばれ、この期間中に日本人の手によって朝鮮神宮内宮は解体され空地となった（森田芳夫『朝鮮終戦の記録･資料編第一巻』巌南堂書店　1979 年　pp13 ～ 14）。

1945 年 9 月 9 日から米軍政がはじまり、京城音楽学校（ソウル大学音楽大学の前身）が 1945 年 12 月頃、米軍政の許可を得て朝鮮神宮の外宮の建物を利用して開校した。

米軍政は顧問官制度を採択、韓国人を顧問官として登用したが、その中には米国に留学していたキリスト教の牧師や宣教師たちが多く選ばれ、その顧問官の協力により朝鮮神宮の跡地と建物の使用権を米軍政からキリスト教系の団体である韓国キリスト教博物館と韓国神学校が得て、李承晩政権期の 1955 年まで利用した。

写真 2 は米軍政期に朝鮮神宮の正殿の跡地に韓国キリスト教の十字架が建てられたと見られる 1 枚の写真であり、この時期には韓国キリスト教系が利用したと考

えられる。

韓国は、1948年に南韓単独の政府である李承晩政権がはじまり、その時点で南の韓国と北朝鮮とに分けられ、その後、1950年6月25日から韓国戦争が3年間続いた。休戦後、1956年8月15日に朝鮮神宮の拝殿の跡地を利用して李承晩大統領の銅像を建設した。1959年5月15日からは、神宮の中広場を中心に国会議事堂の建設工事が開始され、この2つの工事によって外宮の建物が撤去されたとみられる。

だが、李承晩政権の腐敗により、1960年の4・19学生革命が起こり、李承晩大統領が下野するとともに李承晩の銅像を市民と学生が破壊しようとしたが出来ずソウル市によって撤去された。李承晩政権後、新政府が樹立したが、韓国社会は安定せず、1961年の5・16軍事クーデターを招くきっかけとなって国会議事堂建設も中止となり、全ての朝鮮神宮の跡地は南山公園として還元された。

軍事クーデターに成功した朴正熙は、自ら大統領になって南山朝鮮神宮跡地の本格的な開発を進めた。その1つが国会議事堂の予定地であった中広場を利用した南山野外音楽堂建設であり、それは1963年8月5日に完成し、その広場に李承晩政権の最大のライバルであった白凡金九銅像を建設した。さらに、朝鮮神宮の付属建物であった社務所と勅使館の跡地には朴正熙大統領の指示により、1970年10月26日に安重根義士記念館が建設された。この2つの象徴的な建物の建設は、旧政権と朴正熙自らが過去に日本軍将校であった経歴を清算し、自分の正当性を強調するために建てたと考えられる。

以後も朝鮮神宮の跡地は、様々な政策によって利用され開発が行われた。1968年12月には、朝鮮神宮の正殿の跡地に南山植物園の1号館が開設され、その後、続けて2、3、4号館が建てられた。李承晩大統領の銅像が建てられた拝殿の跡地には、1969年6月25日に噴水が建設され、その後、1971年8月15日に植物園の隣に南山小動物園が開園した。参拝所の跡地には、朴正熙大統領の妻である陸英修が1970年7月25日に子供会館を開館し、1970年代までの開発が一幕を閉じた。

今回の報告は、2014年3月29日に開催された『海外神社とは？史料と写真が語るもの―台湾と韓国の事例を中心に―』における筆者の口頭発表をまとめたものである。この発表のもととなった修士論文では、朝鮮神宮の跡地がどのように利用されてきたのかを調査対象として研究を試みた。この場所を、各時代の政権が様々な形で利用してきたことが分かる。韓国人にとってこの場所は、様々な象徴的意味を持っている場所であり、現在もその場所の利用は変化し続けている。

課題としては、「権力の空白期」と米軍政期、李承晩政権期と朴正熙政権期の南山公園開発に関する資料の不足が挙げられる。今後さらなる資料の発見収集と分析が必要となる。

戦後台湾における神社建築の処理政策と金瓜石神社の再利用計画について

林 承 緯

林 承 緯氏

本報告はフィールドワーク、文献資料の研究を通じて、金瓜石神社の当時の姿を把握し、約百年前の祭りを再現することで神社の遺跡・建築の再利用を試みた。つまり、無形文化財の視点から有形文化財の活用の可能性を探ったものである。報告の内容は以下のとおりである。

1　戦後台湾における神社建築の処理政策

1.政府による処理政策

戦後台湾における神社建築の処理政策は、政治情勢や社会環境の変化に伴って進められた。第一段階は1946年1月に行政長官公署が発令した『行政院訓令各縣市政府拆毀日偽及漢奸建築塔碑等紀念物』に基づき、日本から接収した日本資産のうち、記念遺跡や神社などの建築物を社会救済と公益のために改造した（例：嘉義神社→病院）。これに続いて1952年、省政府により日本式の石灯籠、年号を撤去、廃止し、1954年には省政府は景観の妨害にならないもの、また、廃物利用を前提として鳥居、石灯籠などの建築物の改造を許可した。このような政策は日本との断交の影響を受け、1974年に大きな転換を迎えた。『清除臺灣日據時代表現日本帝國主義優越感之殖民統治記念遺跡要點』により、各県市政府に現存する神社を全面的に撤去するよう内政部が発令した。このため、台湾全土の神社建築が大規模な破壊を受けた。

2.処理政策後の神社遺跡

日本統治期、台湾各地に分布した神社の現存状況は、おおむね以下の状態に分けることができる。（一）本殿撤去、（二）中国式建築に改造、（三）神社に国民党の党章を設置、（四）付属施設を改造、（五）本殿に別の祭神を設置。今日も残る神社遺跡は、都市部より地方に多く残り、日本仏教遺跡に比べ破壊、改造の度合いが高い。

2　金瓜石神社の再利用計画

1.金瓜石と金瓜石神社

金瓜石は台湾北部に位置する新北市瑞芳区（旧台北州基隆郡）の金銅鉱山とその集落を指す。当時は東北アジア随一の金山と呼ばれ、非常に栄えた。現在は廃鉱し、主に観光地となっている。また、台湾国内では世界遺産の候補地として挙げられる。金瓜石神社は黄金神社あるいは山神社とも称し、1898年（明治31年）3月2日に創建、大国主命、金山彦命、猿田彦命を祭神として祀った。

2.金瓜石神社再利用の準備

神社の再利用を実施するために、2項目に分けて準備を行った。その一つは「歴史と信仰の研究」で、金瓜石神社創建背景の解析、分霊元の調査（島根県金屋子神社との関係）、神社と地域の関係（特に炭鉱業）、当時の祭りの実態を把握した。もう一つは「空間と建築の調査」で、金瓜石神社の一代目と二代目の社殿設置場所を解明し、神社施設の全貌を明らかにした。

3　金瓜石神社の再利用計画の実行

神社再利用にあたり、イベントの名称を「縁を結びましょう――金瓜石神社をたずねて」とし、当時の祭りを再現した。イベントの目的として次の3つを設定した。（1）博物館に対し新たな動態展示を提案、（2）史跡に触れ、日本文化への理解を深める、（3）地域の歴史を再現。以上を目的とし、往時の金瓜石神社の祭りを再現することによって文化財の再利用を試みた。無論、この遺跡はもはや神道の宗教施設ではなくなっている。しかしながら、鳥居、石灯籠および社殿の礎石などの基礎は今もなお日本の色彩を濃く留めている。これに加え、史料に照らして奉納樽神輿を再現し、無形文化を中心とした文化財再利用を実現した。近年、台湾における文化財保護の意識が高まるにつれて、日本統治期の神社建築が有形文化財に指定されるようになってきた。このような動きのなかで、発表者は現存遺跡の保存から無形文化中心の保護、再利用の可能性を思索した。2012年から開始したこの試みは、その過程において生じた効果や課題を踏まえつつ、時間をかけてこの再利用の価値を検証していきたい。

写真3　日本統治期の金瓜石神社

写真4　再現した樽神輿

会場の様子

研究会報告

イギリス・BICC 中国都市研究ネットワーク会議の参加報告

孫　安石（非文字資料研究センター　研究員）

2014 年 1 月、イギリスの Aberdeen 大学で開催された BICC 中国都市研究ネットワーク会議に参加する機会を得た。私の場合、2 日間の実会議に参加するために、ロンドン経由で乗り継ぎ 15 時間のフライトを利用し、時差のあるイギリスまで行くわけであるからなかなかの強行軍であったといえる。しかし、このような強行軍をしてまでも参加を決めた理由は、一つは報告者とコメンテーターを合わせると合計で 40 名前後のイギリス在住の中国研究者と交流ができるということと、もう一つは、上海史研究の旧友で、いまは中国の海関研究で著名な Bristol 大学（イギリス）の Bickers 教授からイギリスで活躍する中国の若手研究者の活動をみたほうが良いというアドバイスがあったからであった。

会議では期待した通り、イギリスに留学中、またはすでに留学を終え、イギリスの大学で教鞭をとっている多くの中国人研究者と交流することでき、多くの新たな知見を得ることができたので、その一部をここで紹介したい。ただし、残念ながら報告のすべてについて触れることは筆者の能力を超えるものであり、紙面の余裕もないので、ここでは最も印象に残っている 3 名の方の報告を取り上げるに留める。

まず、最初は上海における都市衛生問題として上海租界でどのような方策がとられたのかを論じた Dr. Huang Xuelei（Univ. of Edinburgh）の“*Deodorizing China: Odour, Ordure, and the Colonial (Dis) order in Shanghai, 1840s–1940s*”報告である。この報告は、清末の欧米人の中国経験を書き留めた多くの記録によれば、悪臭が漂う遅れた中国と、ネオン・サインが輝く文明化された上海租界を描写するものが多いが、果たして上海租界ではどのような衛生対策が取られているのか、と問いかけている。

とくに医療分野の宣教活動に従事した W. Lockhart(1811-1896) の記述によれば、そもそも揚子江の下流の運河に巡らせていた上海のイギリス租界の立地条件自体は極めて劣悪なものであった。中国人の住宅はこの不潔な衛生状況をさらに悪化させるものであったから、その劣悪な状況は容易に想像できる。ところが報告者は、産業革命を迎えた初期のイギリスも実は劣悪な衛生状況に直面していたことを忘れてはならないと指摘する。実は、衛生問題は、遅れた中国が直面した問題だけではなく、同時代の世界が経験した共通の問題であったのである。

次の“*The Relationship between the Harbor Coolies and the Spatial Character of Shanghai Whangpoo Harbor, 1880s-1930s*”（Dr. Chen Yunlian, University of Cambridge / Nagoya University）は、20 世紀初期の上海の共同租界の道路と港湾建設を一手に握っていた工部局が黄浦江管理局に命じた港湾のインフラ建設の様子と 1930 年代を前後して行われたイギリスの B&S スワイア商会（Butterfield & Swire Co.Ltd）によって建設、運営されたフランス租界と浦東地区における港湾施設（桟橋、埠頭、倉庫のほか港湾労働者の施設など）の実態を紹介するものであった。B & S 商会のロンドン本社の資料などを駆使した研究成果によれば、B & S 商会は船上から陸へ貨物を運搬する動線を最大限に利用し、倉庫とその他の施設を建設し、労働者の宿泊施設、税関管理員、倉庫管理者などのための住宅設備などを包括した設計を担っていたという。

次の報告“*Children in rural-urban migration in contemporary China*”（Dr. Nana Zhang, University of Warwick）は現代中国が直面している都市と農村間の人口移動の中でも、とくに、地方の留守家庭に残る子供を扱ったテーマであった。この報告は、北京と遼寧省、そして吉林省などの農民工子弟を対象にした学校の聞き取り調査（教員と子弟を対象）の成果を盛り込んだもので、その内容は、故郷を追われる農民工の家庭が破壊される過程を描いているだけではなく、再結合するダイナミズムをも紹介している点、注目に値する視点も多く紹介してくれた。たとえば、円満な家庭を求める農民工子弟の欲求は、学校という別の場所で満たされる時があり、疑似的な親戚の絆が学校で再構成されることもあるという。とくに、新年を迎える旧正月ですらも家族で集まることができないという児童の生の言葉や、両親によって寄宿舎生活を余儀なくされている 10 歳の子供が発する「家庭」という言葉は、現代中国が直面している貧富の格差の問題が、すでに大人だけではなく児童の心をも巻き込んだ一大問題になっていることを余すことなく伝えてくれている、と言わなければならない。

勿論、これらの報告に弱点がないわけではない。たとえば、Huang 氏の報告においては、欧米人の目を通して衛生概念を分析することの有効性を如何に克服すべきか、という問題が依然として残る。たとえば、中国人自身はどのように衛生の問題に取り組んだのか、また、欧米ではなく、日本人の記録の中でみえる衛生の記録は如何なるものであるのかなどである。実は、上海の衛生問題については、日本でも福士由紀『近代上海と公衆衛生』（御茶の水書房、2010 年）が刊行されており、1927 年の上海特別市衛生局の活動や 1930 年代の日中戦争と上海の衛生問題などが究明されつつある。また、Chen 氏の報告が捉える上海港湾についても、日本側の所蔵する外務省外交史料館の史料が一部紹介されているものの、まだまだ多くの課題が残されている。たとえば、大上海都市計画のなかで港湾の建設がとのように位置づけられていたのか、などについても触れる必要があろう。

しかし、それにもかかわらず、今後の中国研究が彼ら中国人留学生組の活躍によって牽引されることは疑う余地もない。とくに、Nana 氏の研究で代表されるように長い期間の現地調査なしでは優れた研究成果を上げることができない社会学分野においては、より急速な変化が出てくることであろう。世界経済を牽引する中国の役割については言うまでもないが、学術研究領域においても中国の台頭は避けられない。その勢いを切実に感じた会議であった。

写真 1　BICC Chinese Urban Studies Network Conference, University of Aberdeen, 16-18 January 2014 の会議の様子

China's Urban Environment, Past and Present
BICC Chinese Urban Studies Network Conference, University of Aberdeen16–18 January 2014

Programme　16th January – King's College room KCG11
Introductory remarks, Dr Isabella Jackson, University of Aberdeen

◇ Panel: The historical environment of the treaty ports. Chair: Dr Toby Lincoln
（1）Deodorizing China: Odour, Ordure, and the Colonial (Dis)order in Shanghai, 1840s–1940s, Dr Huang Xuelei, University of Edinburgh
（2）The Relationship between the Harbor Coolies and the Spatial Character of Shanghai Whangpoo Harbor, 1880s–1930s, Dr Chen Yunlian, University of Cambridge / Nagoya University
◇ Panel: Art and literature in the urban environment. Chair: Dr Chris Courtney
（3）Floating through Beijing: migrant workers, agency and gender in contemporary Chinese fiction, Pamela Hunt, SOASA
（4）Look Behind the Façade – Representations of China's Monumental Architecture in Contemporary Art, Angela Becher, SOAS

17th January – King's College room KCG11
◇ Panel: Managing the urban environment. Chair: Professor Miles Glendinning
（5）Asbestos Pollution Deterrence, Victim Compensation and Allocation of Civil Liabilities Risk through Insurance, Dr Han Yongqiang, University of Aberdeen
（6）Becoming a Transition Town: The Case of Hong Kong and its implications for Building Eco-Cities in China, Loretta Ieng Tak Lou, University of Oxford
◇ Panel: Urban impressions. Chair: Dr Isabella Jackson
（7）City, Faith, and Political Opinion: A Study of Young Professionals in Beijing and Shenzhen, Phil Entwistle, University of Oxford
（8）Japanese Impressions of Shanghai as revealed in the Shanghai Guidebook(1920), Professor Son An Suk, Kanagawa University
◇ Panel: Challenges of the modern city. Dr Norman Stockman
（9）Building the "People's Home"? The transformation of British public housing in Hong Kong and Singapore, Professor Miles Glendinning, University of Edinburgh
（10）Experimenting with New Techniques of Governance in 'China's Manhattan', Dr Anna Boermel, King's College London
◇ Panel: Controlling urban populations. Chair: Dr Anna Boermel
（11）Children in rural-urban migration in contemporary China, Dr Nana Zhang, University of Warwick
（12）Getting the city to comply: Enforcement of the urban resident Minimum Livelihood Guarantee system between 1997 and 1999, Dr Daniel Hammond, University of Edinburgh

18th January – MacRobert Building room MR252
◇ Panel: The urban environment in crisis. Chair: Dr Felix Boecking
（13）The Urban Environment Under Water: Wuhan and the 1931 Flood, Dr Chris Courtney, University of Cambridge
（14）The Battle for China's Capital – Wartime Discussions on National Centrality, Dr Toby Lincoln, University of Leicester Roundtable discussion. Chair: Dr Isabella Jackson

研究会報告

漢陽大学校東アジア文化研究所主催国際会議

日常性へのまなざし

「グローバル時代と東アジアの文化表象」Ⅲ

佐野　賢治（非文字資料研究センター　研究員）

韓国の漢陽大学校人文科学大学東アジア研究所は、2012年９月に国から重点研究所として指定され、東アジアの日常・生活文化表象の昨日と今日を多角的に検討する「グローバル時代と東アジアの文化表象」というテーマで開所以来共同研究を進めてきた。その第３回目の国際学術会議が2014年３月29日（土）漢陽大学校で開催された。折からの桜の開花の中で今回は、韓国と日本の研究者４人ずつが相互にこのテーマに対して話題を提供しコメントをつけるという形で進められた。韓国と中国の研究者による会議は別の時期に開催されるという。今回の会議次第、論題と発表者、コメンテーターは以下のとおりであった。

開会挨拶　　シン・ソンゴン研究所長
＜第１部＞司会：　全　遇容（漢陽大）
発表①　「もののけ姫」にみる日本文化
佐野　賢治（神奈川大）
討論者：　朴　一昊（誠信女子大）
発表②　近代日本正月行事における旧暦と新暦
- 西宮神社十日戎を事例に -
平山　升（九州産業大）
討論者：　金　昌民（全州大）
発表③　伊勢神宮式年遷宮と近代天皇の表象
朴　奎泰（漢陽大）
討論者：　曺　圭憲（祥明大）
＜第２部＞司会：　睦　秀炫（ソウル大）
発表④　日本の精神論と桜の表象
裵　寛紋（翰林大）
討論者：　徐　東周（梨花女子大）
発表⑤　日本茶論に見る「日本的なもの」
- 千利休・岡倉天心・柳宗悦を中心に -
李　京僖（漢陽大）
討論者：　泉　千春（西京大）
＜第３部＞　司会：　吳　秀卿（漢陽大）
発表⑥　東アジアにおける「稲むら」の文化表象的意義
伊藤　好英（慶応義塾大）
討論者：　朴　銓烈（中央大）
発表⑦　「ごはん」をめぐる労働の政治
- 朝鮮人労働者の食生活と労働効率を中心に -
韓　惠仁（成均館大）
討論者：　崔　鐘吉（東義大）
発表⑧　平壌の都市建設と首都としての再編
- 近現代建築の歴史的な読み解きを中心に -
谷川　竜一（京都大）
討論者：　韓　東洙（漢陽大）
＜総合討論＞　司会：　朴　賛勝（漢陽大）

この会議を開催する趣旨は、グローバル時代における今日、東アジアの文化現象、中でも庶民の日常生活にみられる文化表象の背景を探り、その関係性を鳥瞰し、その将来を展望することにあるという。東アジアにおける、政治・経済上の現状、混乱を考えると遠回りのようでも庶民の日常性への相互理解がこうした齟齬を改善する最良の方法であると改めて思いながら私はそれぞれの発表を聞いた。同時通訳を使っての発表は８題目であったが、討論者の事前に準備したコメントの内容は深く詳細であり、会場との質疑応答も的を射た実質的なものであり一日の会議の終了時にはどっと疲れが出たがそれは充実感を伴うものであった。

さて、会議の基調となる話題提供をして欲しいと頼まれた私は宮崎駿監督のアニメ作品「もののけ姫」（1997）を題材に、その背景に照葉樹林文化における樹霊信仰、非定住稲作農耕民文化、職人論などを織り込み、「縄文」と「弥生」、「ヤマト」と「エミシ」（アイヌ）、「職人」と「農民」、「山人」と「常民」、「漂泊」と「定住」など、このアニメ映画が日本民俗文化の構造にかかわる重要な課題を広汎に再考させてくれることをまず指摘した。日本の民俗伝承において、漁民は七浦を潤す鯨に戒名をつけ過去帳に載せ、墓を作ってその霊を供養し、女人たちは２月８日、日頃世話になった裁縫の師匠、針親に対してだけでなく豆腐に針を刺して感謝の意を表し、正月には農具も人とともに歳を取るなど、生物・無生物を問わずその存在を擬人化して霊格を認める事例は豊富であり、宮崎監督率いるスタジオ・ジブリのアニメ作品の底流には、まさに日本的アニミズムの伝統、八百万（やおよろず）の神の考え方が流れている。今日一神教の国々も含め漫画、アニメを中心に日本文化を紹介するイベントが定期的に開催され国際的にも高く評価される理由の一つにアニメーション（animation）の原義、映像に登場するすべての霊的・物質的存在に命が与えられ両義的な“モノ”として扱われていることを主題にして話を進めた。「もののけ姫」は、日本の民俗文化が培ってきた自然－人－カミの三者の共生・共存関係を集約しており、まさに世界に向けて自然環境保全へのメッセージとなるのではと結んだ。

会後の主催者・発表者・討論者の記念撮影

この発表に対して、討論者の朴一昊教授は６項目にわたりA4判２頁に及ぶ詳細な質問文を用意され、遠慮されながら口頭で質問された。その場で即答できないほど深く複雑な内容も含まれ、私は一般論で言い逃れ恐縮した。事前に朴教授と質疑を往復する時間的余裕があればと思った次第である。このように各発表に対する討論者の質問は、事前の熱心な読み込みをうかがわせるに十分なものであった。また、韓国側研究者の発表は日本への留学経験を有する先生方が多いとはいえ、日本側研究者の私たちから見ても課題の選択、調査研究視角の斬新さ、そこから導かれる結論と、すでに国を超えての日本研究の水準の高まり、その深化に内心驚かされたのである。

日本側研究者の発表は、阪神電車の開業・営業政策と西宮十日戎の旧暦から新暦への改変関係を論じた九産大・平山升、にいなめ研究会以降、近年の研究成果を加味しての穀霊信仰の再考を説く慶応大・伊藤好英、韓国側も調査の困難性を伴う北朝鮮・平壌の近代都市計画を現地踏査で報告した京大・谷川竜一の３氏が行った。韓国・中国が正月を旧暦（農暦）で行う背景、平壌の都市計画の実施プロセスと建築家との関係性などの質疑がフロアも含め討議された。

韓国側の発表では、桜が日本人の民族性を象徴するに至ったプロセス、大飯喰らいとされ、戦時期に鉱夫として徴用された朝鮮人労働者の実態を労務関係史資料から分析した発表に対して会場から多くの質問が寄せられた。また、日本文化の精髄とされる茶の湯について、時代の異なる３者を同じまな板に載せ分析した李教授の発表に対し、泉教授は『南方録』の資料としての妥当性をはじめ、発表と四つに組むコメントをされた。伊勢神宮の遷宮儀式を丁寧に取材した朴教授の映像記録には日本の研究者にはない視点が処々に見られ参考になった。

桜や茶の湯など日本人の精神性の内面まで立ち入り、また日本側研究者の視角には入ってこない課題の設定など、一日ではあったが凝縮された内容であり、国際会議ならではの刺激を受けた。普通の人々が普通の人々の日常性を理解しようとの意思が研究者レベルにあってもここまで到達していることに安堵した。月並みな言葉になるが草の根の交流の実質化の必要を身に染みて感じた。センターはじめ、日本常民文化研究所、大学院歴史民俗資料学研究科の韓国の関係機関との地味でもよい持続的な交流の進展に少しでも寄与できればと気持ちを新たにした。

また、国際会議の楽しみは、国内外の旧知の研究者との交流、新規の出会いである。今回は、神奈川大OBの冨井正憲先生、中央大・朴銓烈先生、漢陽大・呉秀卿先生に久し振りに会えた。同宿の日本の異分野の若い研究者からは刺激を随分受けた。呉先生の研究室で一時の茶会は昔話に花が咲いた。その晩は、漢陽大学校国際センター近くの焼き鳥屋で早期退職した主人の話に耳を傾けた。会議を中心に濃密な人との出会いの時間を過ごした。私も年を取ったものである。

韓国でも宮崎作品は人気がある

研究会報告

『東アジアの租界とメディア空間』研究会

東アジアの租界とメディア空間

開催日：2013 年 10 月 18 日、12 月 18 日、2014 年 4 月 18 日
場　所：神奈川大学横浜キャンパス　21 号館 405 会議室

大里　浩秋（非文字資料研究センター　研究員）
内田　青蔵（非文字資料研究センター　研究員）

2013年10月18日の研究会

1　大里浩秋氏「東亜同文会の資料中の租界関連の記事」

この時の内容に若干の資料を追加して報告したのが、2014 年 2 月 15 日の第 3 回公開研究会における大里報告なので、そちらでまとめて内容の紹介をしたい。

2　孫安石氏「Legendary Sin Cities: Paris, Berlin and Shanghaiの上海部分の検討」

このドキュメンタリー・フィルムは、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間、パリとベルリン、そして上海は、資本主義の成熟した都市文化が妖艶な輝きを見せた時代であったという設定の下に、欧米の人にとって「冒険家の楽園」と呼ばれた上海の都市生活を紹介するものであった。番組のなかで、上海の夜の生活をナイトクラブやダンスホールなどを通して紹介したり、パスポートを必要としない租界という聖域が、青幇、紅幇などと呼ばれた中国の秘密社会と結託したり、時には警察までを巻き込む悪の巣窟と化す場面が紹介された。しかし、この暗黒面について、Policing Shanghai, 1927-1937 (Berkeley: University of California Press, 1995) の著書をもつフレデリック・ウェイクマン（F. Wakeman）教授のコメントが加わることで、中国社会の深層を理解するためには光と影の部分をとらえる必要があることが、我々視聴者にも確実に伝わってくる。

2013年12月18日の研究会

この回の研究会では、3 名の報告があった。王宗瑜氏（四川外国語大学）からは、「詩情と市場 - 明治・大正時代の対四川調査」と題して発表があり、近藤恒弘氏（個人収集家）からは「神奈川大学に寄贈した天津関係絵はがきについて」というテーマで発表があった。近藤氏の報告については、本ニューズレター「公開研究会報告」で紹介することとし、ここでは、内田青蔵氏「横浜居留地のメインストリート日本大通りの成立過程について - 幕末から震災復興期まで」について報告する。

横浜居留地は、都市計画的観点から、神戸居留地と同様に欧米の近代的な考え方をいち早く導入したとして高く評価されている。日本の開国は、嘉永 6（1854）年の日米和親条約から始まり、安政 5（1858）年の安政 5 か国条約（5 ヵ国修好通商条約）から国際貿易も開始された。開港場の開設にあたっては、日本側は日本人と諸外国人との接触による問題が生じることを危惧し、安政 6（1859）年に東海道から少し離れた横浜が開港場とされた。そして、外国人と日本人の接触を避ける目的から、横浜居留地は長崎の出島のように本土から隔離された閉鎖的な街として計画され、居留地と本土の行き来する人々をコントロールすることをめざした。その際、この孤立した町には日本人商人エリアを設け、居留地内だけで外国人と日本人の間で事業が可能となるように計画されていたのである。こうした計画は、他の居留地にはない横浜居留地の最大の特徴であった。

さて、こうした独特の特徴を有していた横浜居留地の様子を現在に伝えているもののひとつに、日本大通りがある。この横浜居留地のメインストリートは、かつての日本人町と外国人町の境界線であり、居留地の発展とともに重要な道路として整備された。ただ、この日本大通りは、最初の横浜居留地の計画段階から用意されたものではなく、日本人側と外国人側の町づくりの交渉の過程で慶応 2（1866）年の「第 3 回地所規則」で謳われ、誕生したものであった。そこで、幕末から居留地が条約改正で全廃される明治 32（1899）年までの横浜居留地の様子を描いた地図という非文字資料を中心に、日本大通りの誕生の過程を整理し、併せて横浜居留地の変遷過程を概観することにした。

本発表では、定説として知られる日本大通り完成明治 12 年説とは異なり、地図から見ると東西の波止場の中央に位置する中央道路が徐々に整備され、明治 3（1870）年には公園予定地と連結され、居留地の重要な骨格をなす道路として姿を現している様相が看取されることを指摘した。また、日本大通りの計画の進展とともに、道路正面には海への視界を遮るように税関施設が置かれ、明治 18（1885）年には日本大通りの海側正面に横浜税関が置かれたが、こうした配置計画は、見方によれば税関という貿易行為の取り締まりを強調する場への変化を意味するものともいえ、日本大通りが、当初の日本人町と外国人町の防火分離帯という役割よりも、貿易行為の管理を強調する役割りを担っていたとも考えられることを指摘した。

2014年4月18日の研究会

1　斎藤多喜夫氏（横浜居留地研究会）「横浜の外国人居留地―上海租界との比較を念頭に」

冒頭に、西洋諸国が東洋に進出する際の文化的バックボーンとしてキリスト教信仰があり、これを信仰しない世界を「未開」・「野蛮」と断じ、そうした世界に自らの進んだ文明を分け与えることが義務だと西洋人は考えていた。そして、中国や日本を含む未開国とは不平等条約を結び特権を得ると共に、それらの国を文明化させることを使命とし、他方野蛮人に対しては、植民地体制を敷くことに躊躇しなかったと述べた。

続いて本題に入り、上海の租界が成立し、その拡張と居留民による街づくりが始まってまもなく、工部局による自治が行われていく経過が報告された。さらに横浜居留地については、開港場の場所を巡って、幕府には横浜、外国側には神奈川宿に置く案があり、それらが対立した後、仮居留地が横浜に置かれた。その後、いくつかのトラブルを経て原居留地が成立し、さらに拡張と整備を幕府が行うこともあり、その間に外国側からは上海租界型の自治の獲得が主張されたが、結局は自治権は自ら取り下げた経過が詳述された。また、横浜では、御雇外国人による交通・都市基盤の整備が効果的に行われたことが説明された。

斎藤氏は随所で上海の租界と横浜居留地を比較しながら説明されたが、その多くをここでは割愛し、まとめの部分を取り上げる。それは、政府の関与が、上海の場合は薄いのに対し、横浜の場合は細部にまで関与した、外国の関わり方は、上海の場合はイギリス領事と英国系巨大商社が核になったのに対し、横浜の場合は、他国籍かつ中小の商社が多く関わった、外国からの技術移転は上海は消極的で横浜は積極的だった、自治に関しては、上海では居留民の自治が発展したのに対し、横浜では実現しなかった、都市形成は、上海では租界が核になったのに対し、横浜では居留地は核の一つに過ぎず、日本人居住区でも展開された、というものである。

2　津久井弘光氏（元青森県立田名部高校教諭）「「漢口と日本人居留民」概略」

津久井氏は、近代における日本人の武漢への関わりの歴史について、長年にわたって資料を集めては、それをいくつかの論考にまとめてこられた方であり、日本が中国に置いた租界について調べている我々としては、漢口の日本租界、およびその周辺地区での日本人の動きについて概括的に紹介していただければとお願いし、それに応えていただいたのが本報告である。18 ページにわたる詳細なレジュメに基づき、漢口日本租界の開設から時間の順に話された内容を、ごくかいつまんで紹介する。

漢口日本租界は、1896 年漢口日本居留地取極書に調印し、1898 年に開設した。当初日本人の数は数十人止まりだったが、1905 年の日露戦争後は 500 人を超えるまでに増えた。同年、水野幸吉が領事として赴任してから準備が進み、1907 年に漢口居留民団が設立された。また、商工業従事者の団体も 1905 年に漢口日本商業者組合規則を公布、数度の変遷を経て 1920 年に漢口日本商業会議所の結成となった。この団体の主体がいわゆる会社派であったのに対し、いわゆる土着派（長期間住みついた小売店経営者）は 1931 年に日本人商工聯合会を作っている。

こうした経過を述べる際、津久井氏は漢口日本租界およびその周辺に作った日本人経営の企業について、その数や従業員数を表にまとめて示し、漢口日本郵便局、漢口銀行、警察署などの成り立ちにも触れた。また、何度か起こった現地住民による排日運動の展開について触れ、例えば、1928 年済南事件発生の際の漢口・武昌における運動の様子、同年中に起こった、車夫が日本の陸戦隊機関銃車と衝突して死亡した事件（水杏林事件）に対する地元を挙げての抗議行動について説明した。さらに、1937 年に日中戦争が始まり、居留民の総引き揚げが行われる前の漢口在留邦人名簿（漢口居留民団作成の）によって、年齢別や出身県別、職業別などの統計を作成して、その時期漢口に住んでいた日本人の諸傾向を明らかにし、その後の日本軍占領期と敗戦後 1946 年までの居留民数の変遷についても触れることで、開設時期から敗戦までの人口の変化を追うことが出来るようにした。

研究調査報告

海外神社跡地から見た景観の持続と変容

台湾における営内神社等の調査

坂井　久能
（神奈川大学外国語学部　特任教授）

はじめに

2013 年 11 月 21 日から 27 日まで、台湾における海外神社跡地等の調査を行った。同行者は、当センター研究員の津田良樹、研究協力者の金子展也の両氏である。調査内容は大きく３つに分けられる。「神社」及び「社」、専売局・企業の神社、「営内神社」や陸軍墓地等旧軍施設の跡地調査である。

１．「神社」「社」跡地の調査

「神社」及び神社に準じて公衆の参拝を認めた「社」の跡地調査として、台湾神社跡（現、圓山大飯店、新社殿跡）、台湾護国神社跡（忠烈祠、二･二八公園内の神馬）、花蓮港神社跡（忠烈祠）、吉野神社跡、宜蘭神社跡（忠烈祠）、霧ヶ岡社跡（德龍宮、葉綉清氏から聞き取り）、魚地神社跡（瓊文書社、埔里図書館で資料調査）、南投神社跡（国立南投高級中学）、台中神社跡（中山公園）、嘉義神社跡（嘉義公園射日塔）、台南神社跡（新生里忠烈祠の狛犬、忠義国小で資料調査）、開山神社跡（延平郡王祠）、新化神社跡（虎頭埤園区、新化社跡）、東港神社跡（海濱国小）、芝山巖社（芝山公園）を訪ねた。

これら全てを報告するのは難しいので、既報を除いて特に印象に残った東港神社のみを報告する。同社は、東港郡初の「神社」として 1935（昭和 10）年に創建された。天照皇大神・大国魂命・大己貴命・少彦名命・北白川宮能久親王を祀り、1942 年に無格社から郷社に昇格した[1]。鎮座地は、高雄州東港郡東港街東港（現、屏東県東港鎮豊漁里豊漁街）である。注目すべきことの第一は、1900（明治 33）年に軍艦海門乗組員が東港で殉職したことを記念した碑を、同社建設を機に境内へ移転新設したことである。東港郡守が碑の建設委員長となって海軍大臣宛に提出した東港神社境内図が図１である。一辺 5.58 mの基礎に、地表からの高さ 4.4 mの巨大な「大日本帝國軍艦海門乗組將士殉職記念碑」が手水舎の南に建設された。東港と帝国海軍との深い関係を物語るものといえよう[2]。

第二は、図１に見る帯状に長い境内が、現在海濱国民小学（小学校）の敷地として残っていることである。海濱国小は、1962 年に台湾政府が神社跡地に建てたもので、1973 ～ 79 年に鳥居等を除去し、1975 年には神社本殿を孔子祠に改め、学校にあった孔子像を祀り、現在の孔子祠は 1982 年の建て替えという[3]。この鳥居等の除去や本殿を孔子祠に改めたのは、1972 年に日本が台湾と断交したことにより、政府（内政部）が 1974 年２月 25 日に発した日本の神社遺跡や紀念碑・石造物などの徹底的除去命令[4]に基づくものと思われる。現在、本殿跡に孔子祠が建ち（写真１）、石燈籠の多くは新しく建てられたものであるが、「昭和十一年十二月」銘のものがあり、また「一金貳千三百圓也　蔡朝取　蔡冀」など寄附金奉納を刻んだ石柱が３基建っている。そして、それらや神橋の遺構を含めたかつての帯状の神社空間がよく残されており、現地に立つと、図１の境内図に描かれた神社の景観を思い浮かべることができる。

写真１　東港神社社殿跡。階段の手前に拝殿、階段上に中殿、さらに階段を上った孔子祠の場所に本殿があった。

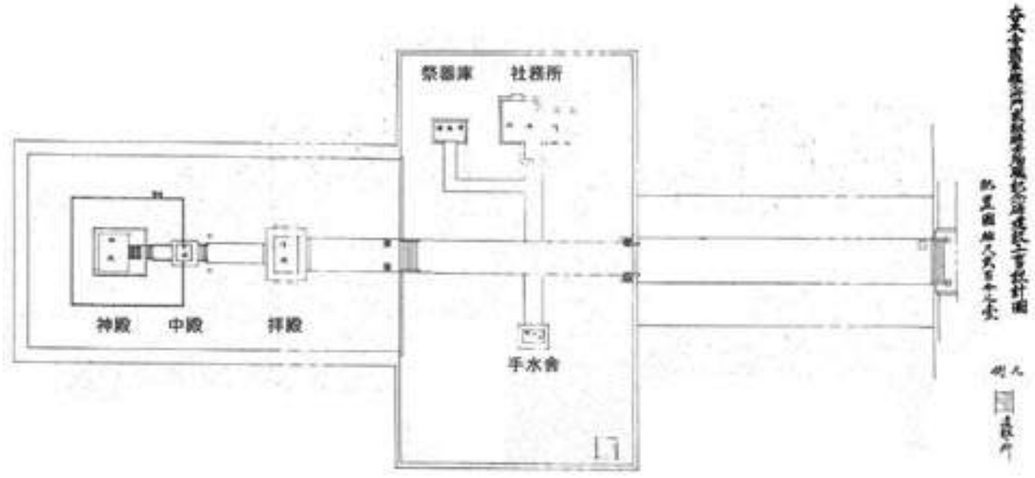

図１　東港神社境内図（大日本帝国軍艦海門乗組將士殉職記念碑建設工事設計図。原図を縮小し一部改変した。出典は注 (2)）。社殿は略東南向きで、手水舎の右下の四角が海門記念碑の建設場所である。

２．「専売局・企業の神社」跡地の調査

台湾総督府専売局の工場内神社として、台北酒工場（現、華山文化園区）の松尾神社跡、樟脳製造の台北南門工場（国立台湾博物館南門園区）の久須乃木社跡、花蓮港支局花蓮港酒工場（花蓮文化創意産業園区）の松尾社跡、宜蘭支局宜蘭酒工場（宜蘭酒廠）の松尾社跡、埔里出張所（埔里酒廠）の松楠社跡（写真２）、台中支局台中酒工場（台中創意文化園区）の松尾社跡、嘉義支局嘉義酒工場（嘉義文化創意産業園区。移転した民雄工業区の玉山高粱酒文化園区に神馬・狛犬を展示）の松尾社跡の７ヶ所を訪ねた。台湾総督府は、阿片･食塩･樟脳･煙草・酒類などの専売を行い、1901（明治 34）年に各専売局を統合して台湾総督府専売局を設立した。酒類は 1922（大正 11）年からの専売である。これらの工場には、樟脳の場合は「久須乃木社」（樟社）、酒類は松尾社というように製造品にゆかりの神が祀られた。それらの跡地はほぼ確認できたものの、遺構は殆ど失われている。一方で、工場の施設・設備はよく保存され、文化創意産業園区等として活用されているのは興味深いことである[5]。

企業の神社として、台南市の林百貨店屋上に現存する林百貨店稲荷神社の遺構を訪ねた（前号で報告）。

写真２　埔里酒廠の松楠社跡。　昭和 11 年鎮座の同社は大山咋神・熊野久須毘命を祀った。その跡地に壺を据え石燈籠を配している。

３．「営内神社」跡地の調査

旧軍施設として、陸軍墓地跡（台北の圓山、台中、台南陸軍墓地）、兵営跡・営内神社跡（台中の台湾歩兵第一聯隊第三大隊、台南の台湾歩兵第二聯隊）、東港の日本軍魂廟・海軍兵舎跡等を訪ねた。ここでは、営内神社について報告する。

営内神社とは、軍隊の兵営内に建てられた神社のことで、隊内神社ともいわれ、上記の工場内神社や企業の神社と同じように「神社」でなく「神祠」であり、邸内神祠（屋敷神）と同類である。但し、軍用地に部隊長が陸海軍大臣に申請し認許を得て建設したことから、公的性格をもつものであったといえよう。

台湾では、台湾歩兵第一聯隊第三大隊（台中分屯大隊）の「護國神社」、同第二聯隊の「忠魂堂」、第五部隊の「営内神社」、澎湖島陸軍官舎内の「天南神社」、第二十震洋特別攻撃隊の「震洋神社」を確認しており、そのうち現地を訪れた２社について報告する。

（1）台中分屯大隊の「護國神社」

台中分屯大隊は、1930（昭和５）年の霧社事件で討伐に参加し、４名の戦死者を出したことから、その霊を祀る祠を建設することになり、翌年４月、靖國神社の賀茂百樹宮司宛に祭神と社名について教えを乞う書翰を送った。賀茂宮司からは、社名を「護國神社」とし、伊勢皇大神宮・明治神宮・靖國神社の守札と四勇士の霊を併祀すればよいであろうとの回答があった。[6] 社名の「護國神社」は、1939 年の招魂社を護國神社と改称する制度改正以前のものとして注目すべきことである。また、同大隊は「乃木神社」という社名で営内神社をその時にほぼ完成させていたので（写真３）、なぜ敢えて社名を尋ねたのかという問題がある。乃木神社とは乃木希典を祀る神社であり、国内でも前後に各地で建設され、乃木はまた第三代台湾総督であったというゆかりがある。その社名に納得していなかったのは、台湾総督としての失政ともいえる乃木像に起因するのかも知れない。護國神社の社名及び祭神の二宮一社の選定は、大隊長の書翰に記す「我國土ノ最南端國防ノ第一線ニ立ツ將卒ノ守護神」に基づくものと思われる。天照大神を主神にあげたのは、最高神で武神でもあることによるものであろう。

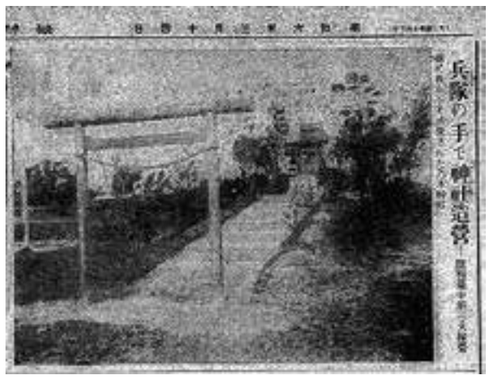

写真３　『臺灣日日新報』（昭和 6.3.14 付）掲載の乃木神社。

大隊の兵営跡は、台中駅の北東 400 m程の南京路・進徳路・自由路三段・雙十路一段に囲まれた辺りで、その広大な敷地は殆ど公園として整備されている。営内神社があった営庭の東端辺りも削平され、写真３のような微高地も見出すことはできなかった（写真４）。

写真４　台中分屯大隊の兵営跡。奥の木が茂る手前に護國神社があった。

（2）歩兵第二聯隊の「忠魂堂」

台南駅に接した国立成功大学の光復校区は、旧台湾歩兵第二聯隊の土地・建物を使用しており、太い柱と赤煉瓦の建物群は荘重な雰囲気を漂わせている（写真５）。営内神社「忠魂堂」は、将校集会所の前にあった。1914（大正３）年の太魯閣（タロコ）蕃討伐で戦病死した将兵 33 名を祀るため創建され、1919 年に白蟻の害による再建にあたり、聯隊は総督を通して「天照大神宮ノ神靈ヲ合祠」したいと陸軍大臣に願い出た。しかし陸軍省副官は「天照大神ヲ合祠スルハ妥当ナラサルノ廉有之候」として英霊のみを祀るよう回答した。[7] 陸軍省は、管理下にあった靖國神社の前掲賀茂宮司に尋ね、宮司は天照大神を英霊に合祀することを避けようとしたものと思われる（護國神社の場合は守札で祀ることで合祀を避けた）。かくして、神明造の営内神社に天照大神は祀られず、霧社事件では聯隊死没者 18 名を合祀して神式の慰霊を行った。

写真５　国立成功大学歴史系館（旧歩兵第二聯隊兵舎）。

写真６　復國建國碑（背後は旧将校集会所建物）。画像は成功大学所蔵 1980 年の卒業アルバム。

写真７　営内神社跡地。正面は将校集会所跡に建立した建物。

日本の敗戦後、兵営は中華民国軍に接収された。成功大学に移管された 1966 年には、営内神社の地に「復國建國」碑が建っていた（写真６）。碑は、営内神社の基礎の上に建ち、碑銘の上には国民党の党章が刻まれていることから、建碑の主体は国（軍）であることがわかる。建碑年は不明であるが、台湾政府は戦後まもなく日本の神社や塔碑の除去をさかんに命じていることと碑銘から、1950 年に蔣介石が総統に復帰して台湾中華民国政府が成立した時期が想起される。神社を壊して「復國建國」碑を建てることで、新しい中華民国の建国を象徴させたものと思われる。

碑は 1980 年代に取り壊され、跡地は駐車場となり、隣接して学生宿舎が建てられている（写真７）。

おわりに

日本の敗戦後まもなくと 1972 年の台湾との断交が、台湾における神社の破壊の大きな画期であったようだ。それらを潜り抜けて今なお社殿や鳥居などを残しているところがある。近年は、文化資源として保存し、さらには活用する動きも見られている。台湾における神社の景観の変容は、その時々の日台関係をあらわしているということを、調査を通してあらためて感じた。

１週間にわたる調査では、特に国立成功大学歴史系の顧盼先生、建築系の蔡侑樺先生や張乃彰さんに現地を案内していただいた。蔡先生には、帰国後も復國建國碑を含めた資料を提供していただき種々ご教授を賜った。台北芸術大学の黄士娟先生・林承緯先生、台北師範大学の蔡錦堂先生にも多くのご教示を得た。霧社の葉綉清さんには、突然の訪問にも拘わらず、アルバムを見せていただきお話をうかがった。厚く御礼を申し上げます。

〔注〕

(1) 台湾総督府文教局社会課『臺灣に於ける神社及宗教』昭和18年

(2) 公文備考、昭和10年Ⅰ兵器、巻10「廃兵器無償下付ノ件」防衛省防衛研究所所蔵

(3) 蔡誌山「東港神社」（『東港采風第十二期』東港鎮文史學會、2002年）

(4) 林承緯『金瓜石神社活化再利用規劃研究案結案報告書』（新北市立黄金博物館、2012年）

(5) 工場の神社は、調査に同行した研究協力者金子展也氏が作成した資料を参照した。

(6) 靖國神社所蔵『昭和六年　庶務書類』

(7) 大日記乙輯、大正８年「台湾歩兵第二聯隊忠魂堂改築ノ件」防衛省防衛研究所所蔵

研究エッセイ ESSAY

紙芝居共同研究の根もとにあるもの

安田　常雄（非文字資料研究センター　研究員）

この４月から、ふとしたきっかけで、非文字資料研究センターの第３期共同研究「戦時下日本の大衆メディア研究」に関わることになりました。もともと私は、戦前戦後の民衆運動史を思想史的視角から検討したいという問題意識から出発し、ここ 20 年ほどは特に戦後日本の民衆運動を中心に、社会と文化をキーワードにしてその構造と意味を考える仕事をやってきました。同時にその間、2003 年から 2011 年まで、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館に勤務し、折から緊急の課題となっていた「歴博現代展示」の新設に携わってきました。この「歴博現代展示」のなかで、大衆文化への関心と接点が浮上することになるのですが、その間は「参考文献」にあるように、その時々の依頼に応じて、大衆文化関連の文章を書いてきたにすぎません。その意味で、いわゆる大衆文化史の専門家ではないのですが、ふり返って見ると、大衆文化は自分のなかで、戦後経験と地続きの存在として見えます。その意味でこの短文は、そうした大衆文化との交渉史の断片であり、またそれを通した「国策紙芝居」共同研究に関わる私的モティーフといえるかも知れません。

いわゆる紙芝居文化は、昭和戦前期と戦後復興期に二つのピークをもっていることはよく知られています。第一のピークは 1930 年代、特に 1935 年前後であり、戦後のピークは敗戦から 1950 年代ということになります。それはいわゆる「街頭紙芝居」の時代であり、戦前では検閲体制が始まるとともに、「街頭紙芝居」から「国策紙芝居」に転換していきます。また戦後の「街頭紙芝居」文化のピークは、1950 年代における「貸本文化」への転位を媒介にしながら、「テレビ文化」の隆盛に呑み込まれていくことになります。

私が育った東京の池上という町にも、「紙芝居のおじさん」は毎日のように来ていました。それは 1950 年代の半ば頃で、当時、私は小学校の上級生。戦後復興の一環だったと思いますが、砂利や砂やさまざまな建設資材が積んであった「砂利山」とよばれていた原っぱでは、午後になると太鼓の音が鳴り響いて、紙芝居が始まることになります。子どもたちが集まり、後ろの方には子どもをおぶったお母さんたちの姿もあり、なかには後ろの方ではよく見えないので、椅子をもってくる大人もいたことを覚えています。水あめやソースせんべいやあんずジャムなど、どことなくいかがわしいお菓子の販売が終わると、紙芝居の始まりです。記憶に残っている出し物は、「ピー助」という漫画に始まり、母親と引き離された、かわいそうな少女を主人公に「母物」の一編がつづき、そしていよいよみんなが楽しみにしている「こわ～い」話が始まります。それは昔ながらの怪談話のときもあり、猫や蛇に変身した少女の復讐の物語などでした。このときには、「ピー助」と愛称でよばれていた「紙芝居のおじさん」はドロドロという太鼓の擬音を背景に、ほとんど奇怪な姿に変貌した少女そのものに成りきって、少女の不幸な怨みを全身で演じていました。

その意味で、紙芝居は、何よりも実演を軸においた演者と観客との直接的コミュニケーションなのであり、原初的メディアといえるでしょう。もちろん紙芝居には絵描きやあらすじを作る脚本家もいるのですが、その核心は演者と観客をつなぐ「場」そのものにあります。「紙芝居のおじさん」は、ときにはアドリブで怖さを盛り上げたり、また観客が少ないと、適当に中間を間引いて、短く切り上げたりすることもありました。

そのように考えてくると、こうした紙芝居上演の現場とはいわゆる大道芸や見世物とも地続きの世界のように思われます。同じ時代、私の住んでいた町には、縁日やお祭りにたくさんの大道芸や見世物がやってきていたのです。たとえば、浪曲や旅回りの芸人の一座も、この広場や本門寺の境内に小屋掛けをしていました。夕食後、祖母に連れられて行くと、木戸銭を払い、下足の札と座布団をもらって、桟敷に座ります。演目はきまって股旅ものや新派の悲劇といったものだったように記憶しています。また見世物では、「蛇おんな」とか「蟹おとこ」など、親の因果が子に報いた宿命の悲劇がくりひろげられていました。たとえば「蟹おとこ」とは、ひとさし指と中指を立てた両手を肩先まであげ、ただ黙々と左右に歩いている人のことだったのです。私の記憶では、周囲にいる大人たちは、腕を組んだりしながら、じっと見つめ、「うーん、蟹おとこだ……」とつぶやいていました。誰ひとりインチキだとか、金をかえせなどというものはいませんでした。それは、うら悲しいいかがわしさへの哀切な応答でした。流れて歩く旅回りの見世物芸人と大衆とのあいだの、この原初的な応答は、大衆文化というもののもつ根源に通じています。まだ高度成長など経験していない 1955 年の頃のことです。こうした関係が、いつ消えていったのだろうか。これが戦後大衆文化の重要な問いの一つだと思うのです。

その後は、中学から高校にかけては、映画ばかり見ている子どもになっていきました。当時の私にとって、私鉄沿線の映画館をわたり歩き、特に学校帰りによく通っていた国立近代美術館フィルムセンターは、かけがえのない学校だったのです。確か一回の入場料は 40 円、1960 年前後の頃です。そこではルネ・クレールの「イタリア麦の帽子」やアベル・ガンスの「鉄路の白薔薇」などを始め、いわゆる「世界の名作」の洗礼をあびた時代でした。その後も、映画への関心は消えたわけではないのですが、あの時代の大衆文化への「狂熱」は何であったかと、ほろ苦く想起することもあります。

途中の経緯は大幅に飛ばしますが、ふたたび大衆文化にもどってくることになったのは、2003 年に国立歴史民俗博物館に移り、「歴博現代展示」の構成に着手するようになったからです。わたしは「歴博現代展示」第６展示室全体の責任者だったのですが、直接に担当したのは、第６展示室後半の「大衆文化を通してみる戦後日本のイメージ」でした。

この常設展示は現在も公開中ですので、ご覧になった方も多いと思いますが、そこでは「喪失と転向」「冷戦」「民主主義」「中流階級化」「忘却」という５つのキーワードに即して、「戦後日本」（1945 ～ 1970 年代）を再定義しようとしました。そこでは、「映画」「記録映画」「漫画」「アニメ」「写真」「ポスター」「流行歌」「テレビ CM」などを使って、時代像を描き出そうとしています。たとえば、1954 年 11 月３日に公開された「ゴジラ」第一作は、第五福竜丸の映像資料や、杉浦茂の「大あばれゴジラ」の漫画と組み合わされ、同時に 1980 年代以降の「平成ゴジラシリーズ」と繋げられて、「戦争」と「核」の記憶の再構成として捉えられています。展示室最後のコーナーには、特注で東宝に制作してもらった 2 m 50cm のゴジラ立像も展示しています。そこに私なりの大衆文化の捉え方が表われているのでしょう。

今回の共同研究「戦時下日本の大衆メディア研究」と題する「国策紙芝居」研究は、そうした私の大衆文化への原初的イメージと、「歴博現代展示」における大衆文化の方法の組み合わせが意識されています。「国策紙芝居」についてはその一例をあげましたが、やや図式的にいえば、近藤日出造の「敵だ！倒すぞ米英を」（1942）の便乗絶叫型と、國分一太郎脚本の「チョコレートと兵隊」（1941）の家族愛型という二つの戦争協力類型を両極として、その断面を捉えることができるかもしれません。

［参考文献］

安田常雄「戦争とメディア・序論―思想史的視角から」東京歴史科学研究会『人民の歴史学』第 161 号、2004

安田常雄「戦時期メディアに描かれた『男性像』」、阿部恒久、大日方純夫、天野正子編『男性史２　モダニズムから総力戦へ』日本経済評論社、2006

安田常雄「大衆文化研究入門」歴史科学協議会『歴史評論』№710、2009 年６月号

国立歴史民俗博物館＋安田常雄編『戦後日本の大衆文化』東京堂出版、2010

安田常雄「戦争と大衆文化―ある漫画作家の戦中・戦後経験」、鳥越皓之編『環境の日本史５　自然利用と破壊』吉川弘文館、2013

図１　滅私奉公：娯楽用　日本教育畫劇（非文字資料研究センター蔵）

コラム 招聘研究員レポート

名前	所属	招聘期間
倪　彩　霞	中山大学　中国非物質文化遺産研究中心　副教授	2013 年 9 月 30 日～ 10 月 20 日
Delphine Vomscheid	フランス国立高等研究院　博士課程	2013 年 10 月 28 日～ 11 月 17 日
沈　梅　麗	華東師範大学対外漢語学院　文芸民俗学専攻　博士課程	2013 年 11 月 5 日～ 11 月 25 日
金　羽　彬	ブリティッシュコロンビア大学　アジア学科　博士課程	2013 年 12 月 2 日～ 12 月 20 日
卞　夢　薇	北京師範大学文学院　民俗学与文化人類学研究所　博士課程	2013 年 12 月 5 日～ 12 月 25 日
Liliana Granja Pereira de Morais	サンパウロ大学大学院　日本文化専攻　修士課程	2014 年 1 月 20 日～ 2 月 9 日
梁　知恵	漢陽大学校　歴史学科　韓国近現代史専門　博士課程	2014 年 2 月 11 日～ 2 月 27 日

私の訪日収穫

倪 彩 霞
（中山大学　中国非物質文化遺産研究中心）

日本の文化財保護活動はアジアの中では最も早く展開され、1950 年代にはすでに専門の法律が制定されて法に基づいた保護活動が行われていた。これを学ぶことを目的として日本で調査を行った。日本での滞在時間はとても短かったが、却って収穫は大きなものとなった。神奈川大学の文化財資料は非常に豊富で、所属する各教授の研究も日中民俗文化分野において非常に優れたものであったため、私は文化の密林の中にいるかのような毎日を過ごすことができ、とても充実した時間を過ごすことができた。

資料を蒐集する時間を除いて、金曜日は佐野賢治教授と廣田律子教授の講義に出席した。授業の中で、例えば日本の民俗習俗と富士山信仰についてなど、日本の若い研究者たちが注目する問題点について徐々に理解していった。また、日本における瑶族研究の現状についても知ることができた。廣田教授の研究チームには神奈川大学や筑波大学、国学院大学や東京大学の研究者らが所属していて、タイの瑶族や欧州の研究資料も研究対象とするなど地域を中国に限定せずに広く研究を進めており、それを知って私は大変驚き心服した。

小熊誠教授は私に東洋文庫の田仲一成先生と会う機会を手配してくれた。田仲先生は 80 歳近くとご高齢だがかくしゃくとした方で、私が修士の頃に初めてお会いしてご指導を得たことがあった。最近では 2010 年に韓国でお会いし、一緒に学術討論会に参加した。今回日本で再会し、私に多くの専門的な指導をしてくださった。

最後に挙げておきたいのが、今回の指導教授である佐野教授が私を文化庁へ同行させてくれたことである。そこでは文化財保護法の改定状況や日本における無形文化財の保護原則や無形文化財と無形民俗文化財の区別、日本無形文化財の数値化と保護状況などに関して、文化財保護の専門家である菊池健策先生にご指導いただいた。菊池先生は私の質問に答えてくださり、文化庁の最新の研究出版物もくださった。

現在私は中国に戻り、資料の整理とともに研究を更に進めるための活動を開始している。

田仲一成先生

菊池健策先生（左）と佐野賢治教授（右）

「城下町の近世武士住宅」

Delphine Vomscheid
（フランス国立高等研究院）

2013 年 10 月 28 日 から 2013 年 11 月 17 日まで、神奈川大学の非文字資料研究センターに訪問研究員として招聘された。今私は、パリのフランス国立高等研究院の博士課程の 2 年生であり、東アジア文明研究センターの研究員として、日本の近世武士住宅を専門に研究している。特に、この滞在の主たる目的は金沢・松江・萩城下町の古地図と武士建築が描かれた絵画のような非文字資料を集めることであった。

まず、神奈川大学の図書館と、非文字資料研究センターおよび内田研究室の蔵書で研究した。詳しい古地図（金沢・松江・萩城下町）と武士建築の絵画（大名屋敷・城・家臣団住宅）のようなさまざまな非文字資料を見つけた。この古地図では、武士地と町人地の区別がよくわかるので、とても面白いと思う。旧城下町の武士と町人の比率を知ることができるので、このような資料は大切だと思う。絵画では、建物の江戸時代の様相が見ることができるし、武士の生活がわかる。さらに、この城下町の武士住宅跡の現在写真が載っている本も見つけた。

また、11 月 3 日には、金沢旧城下町に武士住宅跡の見学に行った。現在の金沢市には江戸時代と幕末の武士住宅が残っている。幸運にも、解体する直前の下級武士住宅の泉家を視察できた。今までこの家には人々が住んでたが、今後は金沢湯涌江戸村に移築して博物館に実物展示されることになるという。旧中級武士の寺島家も視察した。この住宅は立派な家と庭であって、とても貴重な遺産で、中級武士の生活がよくわかる。茶室もあるし、座敷もあるし、倉もあるし、立派な庭もあるし、武士は高尚な人物であったことがうかがえる。長町の武家屋敷も見学した。下級武士の旧高田家長屋門（市指定保存建造物）がある。この建物は長屋門だけだが、入ることができるのでとても面白いと思う。実際に、中間部屋と馬屋に入ることができるので、長屋の規模がよくわかる。そのほかにも、上級武士邸宅の家来（中間）生活がわかる。足軽飛脚の旧清水家と旧高西家も視察した。下級武士なので、家も庭も小さいが、下級武士の生活がよくわかる。また、石川県金沢城調査研究所の研究者の方にお会いして、金沢城下町の歴史について話したり、研究の資料の利用についての助言をいただいた。とても面白い出会いだった。

その後、東京の博物館にも行った。東京国立博物館の「京都―洛中洛外図と障壁画の美」の特別展を見に行った。この展覧会の中に立派な芸術作品があった。特に、洛中洛外図屏風の作品は稀に見る美しさで、これを見ることができて、とても嬉しかった。京都は城下町ではなくても、京都に住んでいだ武士が大勢いたため、武士住宅が残されている（将軍邸）。また、武士の日々の生活も表現されている（犬追物の光景、儀式の光景）。そのほかにも、この展覧会の中にも京都の二条城の襖が展示されている。特に、二の丸御殿大広間四の間の「松鷹図」は立派な芸術作品であって、武士の洗練さを表現していると思う。このように、この美しい展覧会は屏風でも芸術作品でも京都の武士の文化がわかる機会であった。また、江戸東京博物館のコレクションを見に行った。特に、きれいな大名屋敷の模型があるので、建築の材料と建物の規模がよくわかり、とても面白いと思う。

写真 1　金沢市（大手町）の寺島家

このように、非文字資料研究センターの３週間の滞在は本当に素晴らしい経験になった。日本人の研究者と話す機会が持てたこと、日本の図書館を利用できたこと、もちろん実地調査できたことは豊かな研究経験になった。

本当に、非文字資料研究センターに感謝したいと思う。

近代日本キリスト教の伝道活動と民俗的な注目
――明治時代横浜市の考察を中心として

沈 梅 麗
（華東師範大学対外漢語学院）

近代日本のキリスト教布教活動は、布教にあたって日本民俗の現象を研究し利用することを重視しているが、これは、キリスト教が外国へ布教した伝統と大きな関係がある。キリスト教が外国へ布教した歴史からみると、宣教師は布教先に到着すると、できるだけ早くその土地の風土や人情を学んだ。その布教の戦略は、現地の文化への適応性という特徴を表している。つまり、このような文化適応性は、実はその国の伝統文化と儀礼風習に適度に従うということを表しているのである。

また、本文が述べる「近代」の概念は主に中国史学会が定義するもので、その期間は大体 1840 年から 1919 年であり、日本の明治時代（1868 － 1912）とほぼ重なっている。

明治時代横浜地域の宣教師団体の中で、アメリカ長老会の宣教師ヘボン（James Curtis Hepburn）夫妻（左図）の影響は大きく、彼らは 1859 年神奈川に上陸してから明治開教（1873 年）前の十数年の間に、医者をしながら密かに伝道していた。当時、このように宣教師が西洋医学を日本に伝え広めた勢いは非常に大きく、日本皇漢方医道が徐々に衰退に至り、日本の伝統医療の習慣に大きな変化をもたらした。宣教師が医者の身分を通して伝道する形はザビエルの時代からすでに存在し、1563 年来日のポルトガル宣教師ルイス・フロイス（Luís Fróis）は、日本の宣教師はよくハンセン病など差別される病気を治癒し、彼らは時々日本の薬でも病を治したが、患者にそれを教えなかったと記載している。

図１　アメリカ改革長老派教会ヘボン（James Curtis Hepburn）夫妻（横浜開港記念館）

明治８年開教以後、キリスト教は日本での布教活動が順調ではなかったが、宣教師たちは多くのやり方で布教をすすめた。例えば、日本最初の横浜神学校明治学院のような教会学校を創立したり、『常盤』、『女学雑誌』（横浜明治学院岩本善治などが創刊）などの教会雑誌を創刊し、更に慈善活動にも積極的に参加していた。これらの形式を通してキリスト教信者を拡大する努力をする一方、宣教師たちは神学校、教会女学校、教会新聞などのメディアを通して日本社会の民俗を批判した。例えば、日本の婚姻の形式、男性の小児性愛の悪しき習慣、女性の入浴習慣及び性概念などである。また、禁酒を提唱し、日本の服装が華美すぎること、日本の多神教崇拝なども批判した。宣教師たちは以上のようなやり方で、日本社会にキリスト教文明を輸入したのである。

明治時代の日本民俗全体を見れば、キリスト教の布教は一種の策略として展開されたが、ヘボンなどの欧米宣教師たちの努力のもと、日本伝統社会のあらゆる方面ですでに西洋のキリスト教文明は浸透していたのである。

図２　“酒不可飲”（女學雑誌 275 号 明治 24 年７月 25 日）

日本滞在記

金 羽 彬
（ブリティッシュコロンビア大学）

はじめまして！私は 2013 年 12 月２日から 20 日まで神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターに訪問研究員として参りました金羽彬（キム　ウビン）です。私はカナダのバンクーバーにあるブリティシュコロンビア大学の大学院生です。名前だけでは、韓国人だと思われますが、私は 12 歳の時、韓国のソウルからカナダのバンクーバーへ移住した、1.5 世の韓国カナダ人です。

日朝関係史を研究しています。６年ぐらい前から研究していまして、中世と近世期に日朝交流のなかで懸け橋的な役割を果たしていた対馬へは何度も資料調査で訪問したことがありますが、関東で資料調査を行ったのは初めてでした。

私の研究テーマを少し紹介しますと、江戸時代から明治初期にかけて、日本と朝鮮の仲介者であった対馬には、中世から両国の間で疎通を担当していた通訳者がいました。私は彼ら朝鮮語を修得した者の任務及び朝鮮語を習得した方法を研究しています。

研究のため、神奈川大学に滞在した３週間の間、私は神奈川大学だけではなく、神奈川の周辺にある様々な機関を通じて通訳者であった朝鮮語通詞に関する資料を収集しました。まず、神奈川大学の図書館で、私の研究に関係のある文献を中心に資料調査を行いました。また、国立国会図書館や、東京大学史料編纂所、横浜開港資料館、そして、外務省外交史料館でも資料調査を行いました。横浜や東京の様な都会では初めて資料調査を行ったので、とても良い勉強になりました！

神田には多くの古書店が立ち並ぶ。

まずは、このような機会を与えてくださった神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターに感謝を申し上げます。また、神奈川大学の先生方や、非文字資料研究センター事務の方々、また図書館の皆様にもとても親切に手伝っていただき助かりました。誠にありがとうございました。キャンパスの中でも道を迷ったりした時は、神奈川大学の学生が親切に道を案内してくださり、とても良い印象を受けました。また、このような機会があれば、是非来たいと思っています！ Stay Healthy & Happy, Always ～！

12 月といえど、まだ紅葉が美しかった。

渋谷のハチ公前。

青い旅路：日本の藍染についての調査とそれぞれの思い出

卞 夢 薇
（北京師範大学文学院）

民俗学領域に足を踏み入れた時から今までの長い間、私はいつも民間工芸に深い興味を抱いていた。そんなに遠くない過去では、各分野の職人の作った物が私達の生活を支えていた。しかし、今ではそれらオーラに満ちた手作りのものは、工場で生産する同じ規格の製品に代替されていた。

それでも、現在の中国であれ、日本であれ、いくつかの手工芸が工業化社会の狭間で生き抜いている現象が見られる。この百年以上も続いた現代化の荒波の中で他国とよく似た苦境を乗り切った後、どうやって日本の職人たちは伝統の保存を続け、そのうえ時流に適応する中で技術と由緒を継承できたのか？私はその答えを見つけるために、藍染と、互いに関連している事象を研究対象に決めた。

藍染工芸の先決条件は染料である。「藍草」というものは原料の総称であり、蓼藍、山藍、大青、琉球藍など染料制作に使用できる植物は、天候や土壌の品質によって、世界各地に散り散りに見られる。昔は上で挙げた種類が並行して使われていた時代もあったが、今の日本で一番常用されている天然藍染料の原料は蓼藍である。他の東アジア諸国と同様、過去の日本社会で藍染織物は庶民の日常服の材料として経済生活の中で重要な地位を占めていた。藍染織物の供給に応じ、染色を固めるために、業者たちは絶えず製藍法に改良を加えた。中世から今まで日本の藍染法の発展は終始停滞することなく、その過程の中で発酵法（蒅法）が主要な藍染染料製法となって、現代まで持続されている。

神奈川大学の留学生の姚さんの協力で、今回の調査で私は川崎市立日本民家園の伝統工芸館と群馬県桐生市織物参考館・紫（ゆかり）、そして青梅市の藍染工房「壺草苑」の三か所へ行った。藍染のプロセスを体験したほか、従業員たちにインタビューをして資料をたくさん収集した。初めて接する日本の染織文化に対する新鮮さと喜びは言うまでもなく、藍染工芸についての認識も調査の過程の中でだんだんと深まっていった。それに連れて、中国と日本の藍染工芸の相違の原因についても新しい考えが浮かんだ。また、天然藍染料の流通方法を知るために、浅草雷門近くの藍熊染料株式会社へ行くこともあった。そこで染料販売流儀の話をうかがって、現在の日本の藍草の自生状況もよく聞き取った。藍熊が研究開発した「大和藍」というものは革命的かつ極めて利便性を持った天然染料である。以上、四回の調査の間、私は神奈川大学図書館、歴史民俗資料学研究科の図書室、そして神奈川県立図書館の所蔵する藍染の資料を調べて、その詳細さに感服した。蓼藍と蒅の主要産地である徳島県で、「藍師」と蓼藍の培植、蒅の制作などの実地調査を行いたかったが、時間の都合で結局は行けなかった。一つの小さい心残りとも言える。

短い三週間だったが、今までの記憶の中では最も充実した日々の一つである。私の日本語の扱いはまだ上手くないが、指導教授小熊誠先生と研究室の学友達や、調査の途中で偶然出会った方々が私に最大の包容を与えてくれた。乾いた中国北方から来たこの私に横浜は、潮風とともに一番優しい思い出を残してくれた。私にとって今回の訪問経験は一生の宝物となり、それは今後の研究人生において必ずや助けになるだろう。

写真１　藍を建てる時の泡立ち模様。「藍華」と呼ぶものである。

写真２　「壺草苑」という藍染工房の庭。

日本の外国人陶芸家たち

Liliana Granja Pereira de Morais
（サンパウロ大学大学院）

2013 年に始めた実地調査の続きとして、今年はこのテーマに関する知識を深めることに重点を置いて取り組みました。そのために、陶芸に特化した美術館を訪れ、2 人の工芸・陶芸専門家にお会いしました。私が訪れたのは五島美術館、畠山記念館、日本民藝館、出光美術館、三井記念美術館、東京国立近代美術館、根津美術館、箱根美術館です。お会いした専門家は、東京の酉福ギャラリーのオーナー兼館長の青山和平さん、東京国立近代美術館の学芸員の木田卓也さんです。そのほかに、東京藝術大学、上智大学、東京国立近代美術館図書館にて去年よりも多くの書誌調査を行いました。

私が今年訪れた陶芸美術館のほとんどが、茶道と楽茶碗の展示会を行っていました。禅宗の影響を受けた安土桃山時代（1568 ～ 1600 年）の茶の美学は、ほとんどの外国人が日本に対して持つイメージの構築に大きな役割を果たしました。千利休の指導を通じ、楽型もまたこの時代の禅の美学から生まれました。やがてアメリカ人陶芸家ポール・ソルドナーを通じて、アメリカでも用いられ普及されるようになりました。今ではアメリカン・楽として知られています。

私は昨年の研究を通じて、インタビューをした陶芸家のほとんどが日本の陶芸に対して以下のような共通のイメージを持っていることに気がつきました。陶芸を芸術として受け入れていること、作品の機能性と使い道により重点が置かれること、手作りの作品により大きな価値が与えられること、地元の材料を使っていること、食べ物・季節・陶芸とのつながり、自然との近さ・自然が過程の 1 つとみなされること、質素で不完全なものが美しいとされること、修行の過程が厳しく長いこと、出来あがったものと同じくらい過程も重要視されること、です。

私は外国での日本人陶芸家に対するイメージは、民芸が大きく影響しているのではないかと思っています。民芸も禅宗の美学がきっかけで起こったものです。1926 年、柳宗悦により日本の急激な産業化と都会化に対抗して民芸運動が起こりました。民芸運動では、名前の知られていない庶民の職人によって日常生活で使うために作られた、ごく一般的なものの美しさに価値を与えようとしました。この民芸の思想は、日本人陶芸家・濱田庄司がヨーロッパとアメリカで行った会議や実演を通して西洋に広められ、イギリス人陶芸家バーナード・リーチにより「リーチ派」として西洋的なものへと形を変えていきました。

また、1946 年から 1949 年の間、濱田と師弟関係にあった益子出身の人間国宝・島岡達三も、西洋における日本の陶芸の普及に大きく貢献した人物です。師匠（濱田）と同じく、島岡も世界を回って講義や展示会を開き、益子にある自身の窯でも多くの外国人に指導しました。私が昨年インタビューをしたユアン・クレイグも島岡に教わった 1 人です。

昨年の調査で、日本で活動する外国人陶芸家の多くは男性であることにも気がつきました。確認できた 19 人のうち、女性は 4 人だけでした。今年はさらに 7 人の（日本で活動する、あるいは活動していた）女性陶芸家を見つけることができたので、彼女たちへのインタビューを通して、日本人陶芸家の男性優位の世界において女性であることの難しさを探りました。そのうちの 1 人、北鎌倉在住の清水和子さんは、昔は女性は不純だとされていたため窯には入れなかったとおっしゃっていました。日系ブラジル人の陶芸家・後藤レジーナさんは伝統的な日本の陶芸界で働く女性が少ないことに関して、それが汚れ仕事で重労働だからだと述べていました。日本にいる外国人陶芸家の多くが男性である理由を日系アメリカ人のルリさんにお聞きしたところ、伝統的な日本の陶芸は身体的にとても重労働であるため、日本以外の国でもほとんどの窯は男性が所有しているが、特に過去 10 年

から 15 年の間、あらゆる所でこの世界に入り窯を持つ女性が増えてきているということです。最後に、1993 年から京都で活動しているポルトガル人陶芸家のクリスティーナ・マールさんは、世界的にみても家庭生活とは別のことに取り組むのは女性よりも男性の方が多いが、日本では特にそうだとおっしゃっていました。その理由としては、日本は家庭中心の社会であり、その日本の核となる部分を支えているのは女性であることが挙げられました。そのため、女性が専門的な職業にフルタイムで従事することはとても難しいということです。

「日本における外国人陶芸家」というテーマで研究するうちに多くの疑問が生じたため、また、将来博士号を取得するためにさらに分析を深めたいと思います。

植民地期の朝鮮の工業化と地域社会
—朝鮮窒素肥料株式会社の事例を中心に

梁　知恵
（漢陽大学校）

私は 2014 年 2 月 11 日（火）から 27 日（木）まで、訪問研究員として神奈川大学非文字資料研究センターを訪れた。滞在中にはセンターの配慮のおかげで、関連史料館を訪問し、多くの研究者と面談することができた。

訪問研究テーマは「植民地期の朝鮮の工業化と地域社会－朝鮮窒素肥料株式会社の事例を中心に」である。朝鮮窒素肥料株式会社は（現在は水俣病の原因企業として知られているチッソ）日本窒素肥料株式会社の植民地子会社である。この会社は水力発電所を設立して工業用の電力を生産し、ここで得られた水力発電を基にして咸鏡南道（ハムギョンナムド）の咸興（ハムフン）、興南（フンナム）に大規模な化学工業団地を設立した。

いわゆる、「日窒コンツェルン」の中心を形成したこの地域の特徴は、大きく 3 つにまとめることができる。まず、帝国型工業開発の主要な事例としてみられる点である。企業主の野口遵は親会社の本社を大阪に、子会社の本社を京城に設立したが、実質的には主要な工場がある熊本県の水俣と宮崎県の延岡、そして朝鮮の咸鏡南道地域を巡回しながら企業を導いた。換言すれば、この事例は日本帝国の企業が形成される過程の主要な断面をみることができるともいえる。

2 番目は企業の進出と同時に行われた企業城下町の形成に関してである。植民地時代の企業の背後にある都市は建築史や都市計画史的にも非常に重要な事例である。さらに、社会史的にも土地の補償（不動産）の経済と日本の本土から植民地への移住に伴う中産階級の経済を示す非常に重要な事例でもある。

3 番目は軍産都市という点である。化学工場の特性上、1930 年代後半に戦時体制が本格化される過程の中で、この地域での軍需工場や軍需用職業訓練所などが急激に増設されていった。またこの時期に海軍との技術協力、委託事業が推進されており、イギリス軍人とオーストラリア軍人の捕虜収容所が設立された。

このようにこの地域は植民地期の朝鮮の社会経済史を説明するために重要な事例として取り上げられてきた。しかし、従来の研究は「植民地近代化論」と「植民地収奪論」という二つの極端な立場を立証するための手段としてこの事例を挙げたことが多かった。私は個人、集団、ひいては国家に至るまで、さまざまな層位を設定し、これらの間の「関係網」という概念を使ってこの事例にアプローチしてみようと考えている。つまり、既存の研究では工業団地という「規模の経済」に焦点を当てていたが、私は具体的な行為者に焦点を合わせて、個人インタビューと文献資料収集を通じて研究を進めている。

今回の訪問調査期間には神奈川大学図書館と非文字資料研究センターをはじめ、国立国会図書館、拓殖大学の旧外地関係資料コーナー、学習院大学の友邦文庫などの資料館を訪問した。植民地時期に発刊された複数の関連史料と回顧録などを収集することができた。また、森武麿指導教授と 4 名の研究者を伺うことができた。まず、君島和彦教授は教育史、特に歴史教育者として韓国では日韓関係史における非常に有名な学者である。口述インタビュー時の留意点と私の研究テーマの妥当性について説明してくださり、研究者としての姿勢に関して非常に貴重なお話を聴くことができた。そして小野沢あかね教授はジェンダー史の研究者として軍の慰安婦問題などを研究してきた学者である。研究テーマについて貴重なアドバイスをしてくださった。柳沢遊教授は経済史専攻で満州の商工人について研究している学者である。日本国内の経済関連資料について紹介していただいて、私の研究テーマについてもアドバイスしてくださった。水野直樹教授は韓国近代社会史の研究者である。今回は日本国内の関連研究の現状を紹介してくださった。また「北遺族連絡会」からの依頼で 2013 年に咸鏡南道へ訪問し、日本人の埋葬地を見回った経験談を聞くことができた。

今回の訪問調査で収集した資料を中心に、もっと本格的に研究を進めることができるようになった。また「研究者」として亀鑑になる先生方にお会いすることができ、研究者としてのアイデンティティにも多くの影響を受けた。訪問調査という貴重な経験をすることができたことに改めてお礼を申し上げたい。

英語、中国語、韓国語でいただいた招聘レポートは、事務局で日本語に翻訳させていただきました。

コラム 派遣研究員レポート

名前	派遣先	派遣期間
于　洋	浙江工商大学　東亜文化研究院	2013 年 12 月 8 日～ 12 月 28 日
李　徳雨	ブリティッシュコロンビア大学　アジア学科	2014 年 1 月 25 日～ 2 月 14 日
譚　静	北京師範大学文学院　民俗学与文化人類学研究所	2014 年 2 月 25 日～ 3 月 17 日
田中　あや	フランス国立高等研究院　東アジア文明研究センター	2014 年 3 月 4 日～ 3 月 24 日

中国の海洋発展政策と舟山群島新区の発展

于　洋
（歴史民俗資料学研究科　博士後期課程）

2013 年 12 月 8 日から 3 週間、非文字資料研究センターの若手派遣研究者として中国の浙江工商大学東亜文化研究院を訪問し、杭州と舟山群島の調査を行う機会を頂いた。今回は、中国の海洋発展政策、特に舟山群島新区の発展について調査した。

中国の海洋政策は主に毎年の国家海洋局、海洋発展戦略研究所が編集した『中国海洋発展報告』を基にしている。その内容については、中国海洋発展の周辺環境、海洋法律と海洋権益、海洋経済と海洋科学技術、海洋生態環境保護と資源開発、海洋政策と海洋管理、極地科学考察などを含んでいる。

近年、中国の経済は海洋に依存している開放型経済であり、このような経済パターンも持続して深まっている。しかし、中国の海洋経済成長は量から質へ移行するようになったが、その構成はまだしっかり固められていない。構造が最適化されてはきたが、まだ一連の問題が存在している。例えば、沿岸の開発は重視するが、深遠海域の使用は軽視する；資源開発を重視するが、海洋生態の効果と利益は軽視する；ならびに類似の工業団地の建設、産業構造の同一、新たな産業が少ないなど、まだ解決すべき問題がある。

また、中国の海洋発展促進のために、2011 年 7 月 7 日、中国の浙江舟山群島新区の設立が正式に批准された。この結果、舟山群島新区は、上海浦東新区、天津浜海新区、重慶両江新区に続く新たな国家級の新区となり、また国務院が批准した国内初の海洋経済主体の国家戦略的側面をもつ新区となった。舟山群島新区の範囲には、舟山市の現行の行政区域が含まれる。新区の機能は「浙江省の海洋経済発展を先導する区」、「海洋の総合開発のテスト区」、「長江デルタ地域の経済発展の重要な成長区」などと位置づけられている。新区は今後、中国の大口商品の貯蔵、輸送、中継、加工、取引センター、東部地域の重要な海上の開放窓口、海洋や海洋島の科学的保護開発のモデル区、重要な現代型海洋産業拠点、陸海の一体化発展の先行地区になることを目指して努力するという。

舟山市は国内で唯一の島嶼によって形成され、1390 の島嶼を含む市である。東部沿海地域の中心にあり、北は山東省の膠州湾や渤海湾に連なり、南は福建省や広東省に連なり、西には長江が海に注ぐ地点と杭州湾があり、東は太平洋に直接面しており、中国の沿海省の中で太平洋に最も近い群島である。舟山群島海域の陸域面積は 1,440 平方キロメートル、海域面積 20,800 平方キロメートル、深水海岸線の長さは 280 キロメートルに達し全国の 18.4%を占め、港湾建設の条件として優れている。港湾物流、臨海工業、海洋観光、海洋漁業を根幹とし、海洋島の特色を鮮明に備えた海洋経済システムがすでに基本的に形成されている。

具体的な発展目標は：

1．2015 年まで、商品取引プラットフォーム、陸と海の交通ネットワークの連携、金融・情報を支える「三位一体」の着信物流サービスシステムの構築を進め、現代の海洋産業システムフレームワークを構築し、海洋生態環境保護能力を強化し続ける。

2．2020 年までに、海洋生産総価値年間成長率約 20%、総ポートの貨物処理能力は年間 6 億トン以上に達す。

3．2030 年までに、開放型経済がさらに向上し、世界の先頭に立つ現代海洋産業システムを構築し、基本的な舟山群島新区の開発目標を実現する。

舟山群島新区の発展とともに、筆者もこの地域における文化産業と海洋民俗文化の持続と変容の視点から、研究を深めていきたい。

バンクーバーにおける韓人（ハニン）（韓国移民者）達の食文化研究

李　徳雨
（歴史民俗資料学研究科　博士後期課程）

2014.1.25（土）～2.14（金）までの 21 日間、非文字資料研究センターの派遣研究員として、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学アジア学科を訪問し、バンクーバーでの韓国移民者（以下、韓人（ハニン））達の食文化に関して調査を行った。言語と共に母国文化として続いている食文化は、継承力がある非文字文化として数多くの移民者が守っている文化でもある。

カナダへの韓国人の移民は、1960 年代からの宣教、留学、西独への看護師・鉱夫移民者の第２次移民をはじめ、1985 年以降、「投資移民」と呼ばれる移民まででてきて韓人は増加し、現在カナダ全土に約 23 万人の韓人達がいる。バンクーバーでの韓人が最も多かった時期は、1990 年代後半で 15 万人にまで至るほどであった。この時期は韓国での IMF や、早期留学ブーム[1]（英語を勉強させるために子供の時から留学させること）などで海外への移民が一番多かった時期であったが、2000 年代半ばから逆移民で韓国に帰る人々が増加し、2014 年現在、バンクーバーでの韓人は約 8 万人程度であると推定している。

調査期間は 20 日間と短く、50 余年間の韓人達の食生活を把握することは簡単なことではなかった。バンクーバー移民は、他の国の移民より経済的に余裕があって、食生活面では思ったより苦労しなかったという話をよく聞いた。また 1960 年代から 1980 年代にやって来た韓人の大多数は西洋食（カナダ食）に憧れがあり、西洋食に適応しながら機会があれば韓国料理を食べたという話もあった。しかしながら 1980 年代後半から 1990 年代にかけては、バンクーバー移民者の食文化での分岐点になるともいえる。その理由は韓国人移民者の増加、さらに韓国人移民者の需要に伴って大型スーパーマーケットが登場したためである。以前まで韓国食材を購入するには各地の数少ない韓人が経営する食料品屋（グロサリー、grocery）に行って高く買うしか方法がなかったが、大型スーパーマーケットが登場してから、低価格で韓国食材を買うことができるようになったためである。この点が今回の調査を通じて知り得た、バンクーバー韓人の食文化の中で一番印象的なことである。

現在コキットラム（Coquitlam）に位置するコリアンタウンには、ハンナムスーパーマーケットと H マートという大型スーパーマーケットがある。この大型スーパーマーケットが登場したのが 1990 年代後半であった。この大型スーパーマーケットはコリアンタウンを形成するきっかけになって、その周辺に韓国料理屋や雑貨店など約 60 店舗ほどが出来た。またこの大型スーパーマーケットの内部は、韓国の大型スーパーマーケットと品物や雰囲気に大差はなく、韓人達が愛用しているよう

写真 1　コキットラム（Coquitlam）に位置するコリアンタウン

写真 2　韓人会館での旧正月祭り

1 韓国での早期留学ブームは、1997年以降、急速に増加し、2001年には 7,000 余名、2005年には 2万名を超えた。

に見えた。この現象はカナダ食と韓国食の境界を無くすことであったともいえる。この現象は「カモメ家族（超国籍家族、Transnational family)」として知られている移民現象と関係がある。カモメ家族とは早期留学をさせるために母が子供を連れて父と離れて移住する家族をいう。このカモメ家族は 1990 年代以降に増加した新たな移民文化であり、このような移民者増加が以前の移民者に食材購入の容易さを与える結果にも寄与したのではないかと思う。このように母国の食材を購入するということは、移民者達の食生活の中で最も重要なことである。自給自足社会ではない限り、食材を購入するという食文化が母国の食文化を絶えることなく存続させ、またその環境も創っていくのだと思う。

写真３　旧正月の食べ物

写真４　韓国人が経営している寿司屋

派遣研究記

譚　静
（歴史民俗資料学研究科　博士後期課程）

北京という町に対して、私は昔からずっと好印象を持っていた。勿論北京は中国の首都であり、歴史・政治・文化などの中心である。また様々な夢を持っている人々が憧れる魅力的な街である。それだけでなく、北京は様々な文化が交流してきた心の広い街であるために私の好きな街であった。そのため、今回の神奈川大学非文字資料研究センターと北京師範大学文学院・民俗学与文化人類学研究所の交流プログラムの一環として３週間にわたって派遣研究に参加する機会をいただけたことは、非常に幸運であった。

北京師範大学文学院の前身は中国語言文学部であり、中国で最も歴史のある中国語学部の１つである。2003 年５月に設立された。北京師範大学文学院は、前身である中国語言文学部の豊富な資料を基にさらなる発展をとげている。現在、文学院に所属する研究所が合計 11 ヶ所あり、民俗学与文化人類学研究所はその１つである。

民俗学与文化人類学研究所は、大学の主教学棟の７階にあり、主に３つの研究目的（民間叙事学、民俗志学、歴史人類学）を設定している。そこは、歴史文献の整理及び使用を重視すると共に、フィールド調査を通じ、資料の収集や民間生活の観察及び体験をすることを強く主張している。

私は、過山系ヤオ族の儀礼に用いられる信仰神が描かれた掛軸（神画）の研究を進めている。そのため中国人研究者によって行われた過山系ヤオ族の先行研究を明確にすることを目的とし、そこから自らの研究が、長いヤオ族研究史の流れの中のどこに位置づけられるのかを明らかにすることが、今回の派遣の目的であった。今回の調査は、主に民俗学与文化人類学研究所のデータベース及び大学図書館に所蔵している文献資料を基に展開した。今回の調査を通して収集した中国人研究者及び調査団体により行われたヤオ族の調査研究内容は、以下のようになっている。それを時期を分けて簡単にまとめてみた。また各時期において、調査時、調査地、調査者及び団体の順に示している。

● 1920 年代～日中戦争開始（1937 年７月）

1928 年５月～７月／広西省大ヤオ山／広東中山大学生物学部採集隊。

1928 年７月～８月／広西省凌雲県北部／中央研究院民族学組。

1930 年３月～５月／広東省北江地区／広東中山大学生物学部採集隊。

1931 年春／広西省大ヤオ山／広東中山大学生物学部採集隊。

1935 年 10 月／広西省大ヤオ山西部／費孝通、王同恵夫婦。

1935 年／広西省大ヤオ山／徐益棠。

1936 年 11 月／広東省曲江県荒洞ヤオ族村／広東中山大学文科研究所、文学院史学学科、生物学科及び広州市立博物館の所属者（10 名）。

●日中戦争期（1937 年７月～ 1945 年８月）

この時期には、主に広東北部及び広西のヤオ族地域を中心に調査が行われた。

● 1945 年８月～ 1949 年 10 月

この時期は、ヤオ族の調査中断期となっている。

● 1949 年 10 月～文化大革命期

1951 年／各省のヤオ族地域／言語学研究者、歴史学研究者、人類学研究者、民族学研究者が参加した中央訪問団。

1954 年、1956 年、1958 年／各ヤオ族地域の言語、社会歴史、民間文学を対象に総合調査が行われた。／関連分野の専門家及びヤオ族出身の幹部等。

● 1980 年代～現在

この時期は、ヤオ族調査研究が盛んに行われた時期であった。

以上の各時期にわたって中国人研究者は、ヤオ族の起源神話、宗教信仰、葬送儀礼、教育、民間医療の知識、言語、文字などに関して多くの研究成果をあげている。その他には「過山榜」の研究、広東北部ヤオ族の歴史、また歴史上のヤオ族武装蜂起、解放前のヤオ族社会に関する研究成果も多く見られる。

今回の調査においては、非常に有益な資料を多く得ることができた。北京師範大学文学院・民俗学与文化人類学研究所所長の万建中教授はじめ、同研究所の于飛氏と卞夢薇氏の御厚意に対し、心より謝意を申し上げたい。

参考文献：

胡起望、2009 年８月、「瑤族研究概述」『瑤族研究五十年』、中央民族大学出版社、332 頁～ 352 頁

写真１　北京師範大学図書館

写真２　留学生公寓

フランスでの現地調査を終えて

田中　あや
（経済学研究科　博士後期課程）

私は約３週間、フランスのパリ市内にあるフランス国立高等研究院（EPHE）にて、病院の中で使用されている標識（非常口など）について現地調査を行った。EPHE の先生方と田上繁先生、非文字資料研究センタ

ー事務室の彦坂綾さんのおかげでパリの 14 区にある国際大学都市（CIUP）に宿泊することができ、寮生活をしながら研究に取り組むことができた。

現地調査をした結果、非常口のデザインは国際標準化されているが、標識の大きさや表現の仕方、設置場所などは国によって異なっていることがわかった。また、病院によっても異なるが、診療科の位置をわかりやすく示すために、床や壁、柱などに色や絵を使うという標識の導線の考え方を応用していた。このような考え方は、少しずつではあるものの日本国内でも大手建設会社などが建物内に取り入れつつある。私は、パリ市内にある病院の歴史はもちろん、その国の経済状態をはじめ文化や歴史が研究に関係しているため、様々な方面から情報収集を行い、知識を養っていった。

滞在中は、同じ寮に住んでいる方や、そのフロアーを清掃している方、寮を管理されている方と簡単な挨拶に始まり、よく立ち話をした。ほとんどの人が、ほんのわずかな時間でもコミュニケーションを図ろうという気持ちが高く驚いてしまった。逆に、バスや地下鉄では、時間帯にもよるが、会話を楽しんでいる人もいれば、多くの人は新聞や分厚い本を読んでいて、それにもとても驚いた。

現地の指導教官であった Charlotte Von Verschuer 先生からパリ市内外にある国立図書館を紹介して頂いたので、現地での研究にとても役に立った。Verschuer 先生のご紹介で、ソルボンヌ大学近くの図書館や東アジア文明研究センターにて、貴重書籍などを拝見させていただいた。そこでは日本国内では見ることができない資料を拝見させていただき、そこで私は文化財保護の重要さを改めて知ることができた。

滞在してから 1 週間経ったころに非文字資料研究センターを通して知り合った Delphine Vomscheid さんと Quai de la Gare 駅の近くで会った。その時に「本気で良い研究成果を残したい気持ちがあるのなら大学の図書館を紹介するよ」と言われ、Delphine さんが在籍している大学の図書館を紹介して頂いた。図書館の中に入ると、図書館の閲覧席はいつも満席で、みな真剣に机に向かって勉強や研究をしていた。その姿を見る度に、「私自身、研究に対してもっと真剣に取り組まなくてはいけない」と、身が引き締まる思いがした。CIUP の中にも図書館があり、そこでも同様の光景を目にした。大学や CIUP の図書館にある書籍を読んでは、参考文献のページで新たな書籍を見つけ、本の所蔵先を調べると他の図書館にあることが分かり、そしてその図書館に行ってみるといった、“図書館の縁” ともいえる繋がりが帰国する間際まで続いた。

EPHE の Christophe Valia-Kollery 先生には大変お世話になった。病院の取り組みや、必ず行っておくべき病院を教えて頂いた。Valia-Kollery 先生と週 1 回、標識 1 つから見える日本とフランスの考え方の違いや病院の現状など、幅広い視点から議論させて頂くことができ、とても感謝している。

研究の合間や調査機関の移動途中には、いつも空を見ていた。日本と気候条件は異なるが空の色がとても綺麗で印象的だった。今でもその写真を見る度に、現地にいた時のことを思い出しては頑張ろうという気持ちになる。

EPHE の Laurence Frabolot 先　生、Charlotte Von Verschuer 先生、Christophe Valia-Kollery 先生、Delphine Vomscheid さん、神奈川大学非文字資料研究センターの田上繁先生、事務の彦坂綾さんをはじめ大変お世話になった事務の方々、日頃、授業や研究等で大変お世話になっている小山和伸先生と的場昭弘先生、諸先生方には、今回フランス国立高等研究院に籍を置かせて頂き現地調査をさせていただく機会を与えてくださったことにとても感謝している。この研究を通して非文字の可能性は沢山あることに気付かされた。本当に、ありがとうございました。

いつも見上げていたパリの空

研究の息抜きに散策した公園

2014 年度　センター研究員・研究協力者

センター研究員

名　　前	所属部局	職　　名	研究班
内田　青蔵（センター長）	工学研究科建築学専攻	教授	3
大里　浩秋（副センター長/運営委員<研究会担当>）	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	3
小熊　誠（運営委員<国際交流担当>）	歴史民俗資料学研究科	教授	4
熊谷　謙介（事務局長/運営委員<事務総括担当・編集担当>）	外国語学部国際文化交流学科	准教授	2
鳥越　輝昭（運営委員<国際交流担当>）	外国語学研究科欧米言語文化専攻	教授	2
大串　潤児	信州大学人文学部	准教授	8
川島　秀一	東北大学災害科学国際研究所	教授	5
木下　宏揚	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	7
金　容範	非文字資料研究センター	客員研究員	3
小松原　由理	外国語学部国際文化交流学科	准教授	2
佐野　賢治	歴史民俗資料学研究科	教授	7
須崎　文代	非文字資料研究センター	客員研究員	3
孫　安石	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	3
田上　繁	歴史民俗資料学研究科	教授	6
津田　良樹	工学部建築学科	助教	4
富澤　達三	葛飾区郷土と天文の博物館	博物館専門調査員（非常勤）	8
中島　三千男	歴史民俗資料学研究科	教授	4
能登　正人	工学研究科電気電子情報工学専攻	准教授	7
ステファン・ブッヘンベルゲル	外国語学部国際文化交流学科	准教授	2
ジョン・ボチャラリ	明治大学文学部 歴史民俗資料学研究科	客員教授 非常勤講師	1
前田　孝和	株式会社　神社新報社	取締役総務部長	4
宮田　純子	工学部電気電子情報工学科	特別助手	7
村井　寛志	外国語学研究科中国言語文化専攻	准教授	3
森　武麿	歴史民俗資料学研究科	教授	6, 8
森山　優	静岡県立大学大学院国際関係学研究科	准教授	8
安田　常雄	歴史民俗資料学研究科	特任教授	6, 8
安室　知	歴史民俗資料学研究科	教授	5
クリスチャン・ラットクリフ	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1

研究協力者

新垣　夢乃	歴史民俗資料学研究科	博士後期課程	8
稲宮　康人	写真家		4
金子　展也	株式会社　日立ハイテクトレーディング		4
何　彬	首都大学東京教養学部	教授	1
菊池　敏夫	日本大学通信教育部	非常勤講師	3
吉川　良和	外国語学部中国語学科	非常勤講師	3
君　康道	東京大学大学院総合文化研究科	講師	1
栗原　純	東京女子大学現代教養学部	教授	3
小松　大介	豊島区立郷土資料館	資料整理員	7
小山　亮	明治大学大学院文学研究科	博士後期課程	8
辻子　実	日本キリスト教協議会靖国神社問題委員会	委員長	4
鈴木　一弘	高知大学自然科学学系理学部門	助教	7
徐　東千	東京大学生産技術研究所	準博士研究員	1
田島　奈都子	青梅市立美術館	主査　学芸員	3
常光　徹	国立歴史民俗博物館	教授	5
冨井　正憲	漢陽大学校建築大学	教授	3
中井　真木	早稲田大学国際教養学部	助手	1
原田　広	非文字資料研究センター		8
松田　睦彦	国立歴史民俗博物館	准教授	5
松本　和樹	歴史民俗資料学研究科	博士後期課程	8

名　　前	所属部局	職　　名	研究班
山本　志乃	旅の文化研究所	主任研究員	5
李　利	非文字資料研究センター		1
若宮　幸一	旧古河鉱業若松ビル	館長	6
渡邊　奈津子	非文字資料研究センター		4

研究班：1　『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究
2　19世紀前期ヨーロッパ生活絵引研究
3　中国・朝鮮の旧日本租界
4　海外神社跡地のその後
5　汽水の生活環境史
6　船上生活者の実態とその変容に関する研究
7　インターネット・エコミュージアムのためのデータマイニングとユーザインタフェース等の基盤技術に関する研究
8　戦時下日本の大衆メディア研究

2014 年度　奨励研究者決定

研究課題	氏名（所属）
非文字資料から見る「かくれキリシタン信仰」	小泉　優莉菜（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
フエ地域のオンタオ（竈神）祭祀シン村オンタオ版画を中心に	鍋田　尚子（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
韓国解放後における6つの国弊社の解体と跡地変遷の研究	諸葛　衍（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
現代華北農村の土地制度の変革による家産分配の変化	王 新 艶（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
階段から見た我が国戦前期の住宅の変遷に関する一考察	古俣　和将（工学研究科建築学専攻博士前期課程）

国際常民文化研究機構　刊行物

神奈川大学国際常民文化研究機構より、国際常民文化研究叢書が４巻刊行されました。

国際常民文化研究叢書　第５巻
環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究

国際常民文化研究叢書　第６巻
民具の名称に関する基礎的研究［民具名一覧編］

国際常民文化研究叢書　第７巻
アジア祭祀芸能の比較研究

国際常民文化研究叢書　第８巻
アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象［資料編］

神奈川大学日本常民文化研究所　調査報告書

第 21 集（常民文化奨励研究　調査報告書）
『有明海及び中海の里海としての利用慣行』

第 22 集（常民文化奨励研究　調査報告書）
『アイヌ民族に伝わる漆器の調査研究ーアイヌ民具としての漆器類の基礎的データの収集と分析ー』

神奈川大学日本常民文化研究所　展示室のご紹介

2014年3月25日、横浜キャンパス新棟（3号館）の完成に併せて、同３号館内に「神奈川大学展示ホール」が新設され、その一角に〔神奈川大学日本常民文化研究所展示室〕〔企画展示室〕が新設されました。

〔神奈川大学日本常民文化研究所展示室〕は1921年渋沢敬三により創設されて以来の研究所の変遷を、実物資料と写真パネルを中心に展示しています。

〔企画展示室〕では、第１回企画展として「近藤友一郎和船模型の世界」を開催しています。この展示は所蔵する「近藤和船研究所コレクション」の船大工道具や模型などの資料を展示し、船大工近藤友一郎氏の卓越した技術と研究によって制作された和船模型をとおして、船を介した海との関わりの重要性を考えるものです。また地下１階ロビーには近藤氏が製作した和船の実物大断面模型も展示されています。

開　館：月～土曜日　10:00 ～ 17:00　参観自由　※入館は16:30まで
休　館：日曜日・祝日、大学所定の休日、授業日以外の土曜日

第 18 回常民文化研究講座「船模型・船図・船絵馬」ー和船資料の保存と活用ー

趣　旨

日本常民文化研究所は、創設以来海村資料による海域海民史研究に先駆的役割を果たしてきた。中でも当研究所財団の初代理事長を務めた桜田勝徳は、日本各地に残る木造漁船の船名を収集整理した「船名集」や、北陸山陰地方の漁村に残る木造漁船の中央断面構造の分析から和船の発達過程を論じ、現在の和船研究の基礎を築いたといえる。

このたび、船大工の経験を生かし和船研究の成果を船舶模型の製作により発表してきた近藤友一郎氏が開設した「近藤和船研究所」の資料が当研究所に受け継がれ、その一部を紹介する企画展「近藤友一郎和船模型の世界」が開催されている。

近年、菱垣廻船実物大復元船を展示していた大阪市の「なにわの海の時空館」や青森市の「みちのく北方漁船博物館」が相次いで閉館するなど、和船資料の保存には困難な情勢となっている。そこには、船という大型資料のもつ特有の問題点も垣間見られるが、海そのものに対する関心の希薄さも感じられる。

そこで、本年度の常民文化研究講座ではこれらの問題点を念頭に、和船研究のこれまでを振り返り、実物資料とともに和船研究にとって重要な模型・図面・絵馬をはじめとする絵画資料に焦点を当て、それらの調査、収集、保存と活用について検討を加えたい。

日　　時：2014年11月15日（土）13：00 ～ 17：00
場　　所：神奈川大学横浜キャンパス　３号館305教室
基調講演：昆　政明（神奈川大学）
「復元弁才船の帆走と海事資料の活用」
パネル報告：真島俊一（TEM研究所）
「近藤和船研究所の資料とその特長について」
小堀信幸（船の科学館）
「海事資料保存の現状と課題」
神野善治（武蔵野美術大学）
「船霊と船の祭りー船の民俗学ー」
総合討論：コーディネーター 小島孝夫（成城大学）
※報告のテーマは変更することがあります。
主　　催：神奈川大学日本常民文化研究所

お問い合わせは、神奈川大学日本常民文化研究所
TEL045-481-5661　内線4358

第 97 回神奈川大学日本常民文化研究所研究会

憑霊信仰の歴史と民俗

日　時：2014年10月15日（水）17:30 ～ 19:00
場　所：神奈川大学横浜キャンパス　９号館11号室
講演者：酒向伸行（御影史学研究会代表理事）
主　催：神奈川大学日本常民文化研究所

お問い合わせは、神奈川大学日本常民文化研究所　TEL045-481-5661　内線4358

年報『非文字資料研究』への寄稿について

人類文化の研究は、人間それ自身と人間が織り成す社会を研究することを目的とするが、その研究は文字で表現された資料を主な対象として行われてきた。しかし、人間の活動とその結果生み出されるものは、文字で記録されたものに止まらない。絵画・写真・映画・建築・民具・音声などの形で記録されたり、地形や景観あるいは人間の身体それ自身に刻み込まれたりもする。さらに、匂い・しぐさ・味覚・感触など「記録化」することが難しいものも、人類文化を構成する大事な要素である。

非文字資料研究センターは、そのような文字以外の記録及び文字では表現されにくい人間の諸活動を「非文字資料」として体系化し、それを研究する新しい方法を開発し、より包括的な人間と文化の理解にいたることを目指している。21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」(2003－2007年度）以来、わたしどもは、その目的を達成するために＜図像＞＜身体技法＞＜環境・景観＞のなかから研究課題を絞り込み、共同研究を展開してきた。この共同研究は、歴史学・民俗学はもとより、文化人類学、比較文化論、美術史、建築史、災害史、情報科学などを専門とする内外の研究者によって支えられてきた。

このように多様な学問的広がりを有する非文字資料は、世界各国の地域文化の諸相を具体的かつ可視的に示す絶好の資料であるとともに、資料自体が多層的な時代・地域において蓄積されてきた背景をもっているため、研究方法としても比較歴史的な視点を求めるものであり、ひいては、人類文化研究の総合的・学際的な発展の可能性を有してもいる。

しかし、研究資料の分析指標の設定、意味の解読という困難な作業には、研究概念と成果の普遍性が求められる。また世界共通の標準的・普遍的な研究資料の資料化・体系化を行うには、世界各地域の関連学問分野の研究者による相互検証が不可欠である。本センターの研究活動においても、関係研究者との共同作業を必要としている。

年報『非文字資料研究』は、世界の各地域において活躍されている非文字資料研究者からの寄稿を歓迎し、本誌が多分野にわたる研究者相互の学問的遭遇の場として発展するとともに、人類文化の豊かな研究に寄与することを期待する。

年報への寄稿をご希望の方は、当センターのホームページをご参照いただき、執筆要項等の詳細をご確認ください。

エントリー募集期間：毎年７月～９月
原稿締め切り：毎年 11 月末（その後、査読があります）
エントリー用紙：当センターのホームページよりダウンロードしてください。
年報執筆要項：当センターのホームページよりご確認ください。
エントリーシートの提出・年報に関する問い合わせ先：
非文字資料研究センター　(E-mail: himoji-nempo@kanagawa-u.ac.jp)
ホームページ：　http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/

主な研究活動

運営委員会

2013年度
第8回　1月29日　2013年度研究協力者人事について、センター長の選任（二次投票）について、2014年度以降の客員研究員の扱いについて、2013年度予算残額の扱いについて、21号館４階研究室の改修について
第9回　2月28日　センター規程の一部改正（案）について、2013年度事業報告書（案）について、2014年度事業計画書（案）について、2014年度研究担当者人事について、年報執筆要項の改訂について、2014年度海外提携機関との招聘・派遣研究員の運用について
第10回　3月20日　センター要覧2014-2016年度版の編集について、2014年度海外提携機関からの招聘研究員募集要項について、2014年度海外提携機関への派遣研究員募集要項について、2014年度のセンター運営体制（準備・引継ぎ等）について
2014年度
第1回　4月23日　2014年度予算（配分）について、2014年度奨励研究募集要項について、ニューズレターNo.32の編集方針について、年報執筆要項の改訂（案）について、査読規程の改訂（案）について、2014年度第1回公開研究会(租界班 第43回研究会)、2014年度第2回公開研究会(租界班 第44回研究会)について
第2回　5月28日　2014年度奨励研究審査について、2014年度海外提携機関への派遣研究員について、2014年度海外提携機関からの招聘研究員について、年報執筆要項の改訂（案）について、査読規程の改訂（案）について

研究員会議

2013年度
第4回　12月13日　センター長の選任について
第5回　1月29日　センター長の選任（二次投票）について、2014年度以降の客員研究員の扱いについて、2013年度予算残額の扱いについて、21号館4階研究室の改修について
第6回　2月28日　センター規程の一部改正（案）について、2013年度事業報告書（案）について、2014年度事業計画書（案）について、2014年度研究担当者人事について、年報執筆要項の改訂（案）について
2014年度
第1回　4月23日　2014年度予算（配分）について

研究会

研究班

2013年度
『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究・研究会　1月7日、2月13日、14日、23日、24日
東アジアの租界とメディア空間・研究会　12月18日
2014年度
中国・朝鮮の旧日本租界・研究会　4月18日
戦時下日本の大衆メディア研究・研究会　4月30日

現地調査

調査テーマ	日　程	場　所	調査メンバー
『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究	2014年3月20日～31日	ドイツ・オーストリア(ミュンヘン・ウィーン他)	ステファン・ブッヘンベルゲル
東アジアの租界とメディア空間	2014年1月15日～19日	イギリス（アバディーン）	孫安石
水辺の生活環境史	2014年2月21日	東京築地	安室知・川島秀一・常光徹・山本志乃・松田睦彦

編集後記

今年度から共同研究の第３期が始まりました。各研究班の紹介とともに、昨年度末に行われた租界班と海外神社班の公開研究会の報告をお送りします。また、好評を得た国策紙芝居の公開研究会を出発点として、「戦時下日本の大衆メディア研究」研究班が立ち上がりました。今回も内容盛り沢山で増頁となりましたが、今後も研究報告を中心に、当センターの活発な研究状況をお伝えしていきます。(K.K)

表紙紹介

台北市の北部（現在の圓山大飯店の地）に、明治 34（1901）年に鎮座した官幣大社台湾神社であるが、社殿群や付属施設などの全貌を示す資料は意外と少ない。その全貌を立体的に鳥瞰図として示すものが『官幣大社台湾神社境内之図』（辻子コレクション）である。縦600mm、横 780mm の比較的大きな細密銅版画であり、建物細部や狛犬・石燈籠まで詳細に描かれている。一方、写真の狛犬は圓山大飯店前に今も残る神社時代の狛犬である。（写真撮影：津田）

Information

神奈川大学非文字資料研究センター　2014 年度　第 3 回公開研究会

「『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編からみえる近世の奄美・沖縄の世界」

趣旨

神奈川大学非文字資料研究センターでは、日本常民文化研究所が行った『絵巻物による日本常民生活絵引』の研究から受け継いだ「日本近世生活絵引」の研究を継続的に行ってまいりました。絵引研究とは、近世に描かれた絵画を題材として、そこに描かれた人々のしぐさやモノに対してその名称を記し、当時の庶民の生活を歴史的にも民俗的にも生き生きと描き出そうという趣旨の研究です。

2011 年度から 3 年かけて、『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編を編集し、この度刊行されました。その研究成果報告会を、地元沖縄県で開催しようというのが今回の趣旨です。この研究で取り上げたのは、「琉球交易港図屏風」（浦添市美術館蔵）、「八重山蔵元絵師画稿」（八重山博物館蔵）、「琉球嶌真景」（名護博物館）の 3 点です。

その絵引研究に直接携わった方々に、その研究からみえてきた近世における奄美・沖縄の世界について語っていただき、さらにコメントをつけて絵引研究の面白さを沖縄の方々にお伝えしたいと思います。

日　時：　2014 年 10 月 26 日（日）13 時～18 時
会　場：　沖縄県立博物館・美術館　講堂

主　催：　神奈川大学非文字資料研究センター／沖縄県立博物館・美術館
後　援：　浦添市美術館　石垣市立教育委員会　名護博物館
発表者：　富澤達三（非文字資料研究センター）
「絵引研究について」
豊見山和行（琉球大学）
「琉球交易港図屏風からみる琉球の世界」
得能壽美（法政大学沖縄文化研究所）
「八重山蔵元絵師画稿からみる八重山の世界」
川野和昭（南方民俗文化研究所）
「琉球嶌真景からみる奄美の世界」
コメンテーター：　田名真之　真栄平房昭　津波高志　石垣博孝
本村育恵
コーディネーター：　渡辺美季（東京大学）　小熊　誠（神奈川大学）
※詳細は1か月前にホームページに掲載予定

お問い合わせは、非文字資料研究センター
TEL:045-481-5661（内線 3532）

非文字資料研究センター　研究成果報告書

「日本近世生活絵引」奄美・沖縄編

- 2014 年 3 月 20 日刊行
- 内容：
  - Ⅰ　琉球交易港図屏風
  - Ⅱ　八重山蔵元絵師画稿
  - Ⅲ　琉球嶌真景
  - 解題と考察

第７回外国人居留地研究会 2014 全国大会　横浜大会

開国 160 周年　日本近代化の扉を開く

開催日：2014 年 10 月 4 日（土）5 日（日）
会　場：横浜市開港記念会館
2014 年 10 月 4 日（土）
第1部　13:00～15:10　講演
居留地のアマチュア音楽家たち（斎藤多喜夫　横浜外国人居留地研究会会長）
横浜外国人社会の現代史 - 戦争・革命・音楽（大西比呂志　フェリス女学院大学教授）
横浜の西洋音楽：宣教師の教え給いし歌（秋岡陽　フェリス女学院大学学長）
第2部　15:30～16:00　音楽
ピアノ演奏　落合敦（フェリス女学院大学教授）
合唱　フラウエンコーア（フェリス女学院大学音楽学部・声楽アンサンブル）
2014 年 10 月 5 日（日）
第1部　9:15～11:45　シンポジウム「租界と居留地 - 都市と建築の視点から - 」
中国における日本租界がたどった道（大里浩秋　神奈川大学教授）
横浜居留地の初期洋風建築について（内田青蔵　神奈川大学教授 / 非文字資料研究センター長）
上海港湾研究 - 水先案内人（PILOT）協会を事例として（孫安石　神奈川大学教授）
横浜外国人居留地と赤煉瓦 - 近代遺跡調査の成果から（青木祐介　横浜都市発展記念館主任調査研究員）
第2部　13:00～15:00　史跡巡り
主催：全国外国人居留地研究会横浜大会実行委員会（横浜外国人居留地研究会／神奈川大学非文字資料研究センター租界班）
共催：外国人居留地研究会全国会議／横浜市中区役所

詳細およびお問い合わせ先：　横浜外国人居留地研究会
http://yokohama-fs.jimdo.com/

神奈川大学非文字資料研究センター　2014 年度　第 4 回公開研究会

「海外神社・旧樺太（現ロシア連邦・サハリン州）における神社の創立と、今日の神社跡地の現況について（仮）」

日　時：2014 年 11 月 22 日（土）14:00 ～ 18:00
会　場：神奈川大学 3 号館 207 号教室
報　告：「旧樺太時代の神社について（仮）」
（前田孝和　非文字資料研究センター客員研究員、神社新報社取締役）
「旧ソ連邦時代の神社政策と神社跡地の現況について（仮）」
（I.A.サマリン　ロシア・サハリン州文化局）
※詳細は1か月前にホームページに掲載予定

お問い合わせは、非文字資料研究センター
TEL:045-481-5661（内線 3532）

神奈川大学歴民調査報告第 15 集

三津の民俗ー静岡県沼津市三津ー

- 2014 年 3 月 31 日発行　A 4 版 76 ページ
- 発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
- 内容：約 80 年前、渋沢敬三は沼津市三津に逗留したことがある。その場を訪れ、民俗学調査実習を行った。参加した院生 10 名のうち、ほとんどが中国からの留学生だった。三津のご老人に生活の話を伺い、中国との比較の視点で三津の民俗をまとめた。

神奈川大学歴民調査報告第 17 集

南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史文化調査団収集文献目録

- 2014 年 3 月 31 日発行　A4 判 174 ページ
- 発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
- 内容：「中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅰ・Ⅱ」（2011 年・2012 年）に続き 3 冊目となる。南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史文化調査団収集文献は文献の種類が網羅され、内容から見ても充実しており、現在継承の危機を迎えつつあるタイのヤオ族の儀礼文献として大変に貴重な資料といえるが、閲覧撮影を行った全資料について目録を作成した。

非文字資料研究　No.32

発　行　日　　2014年 7 月25日 発行
編集・発行　　神　奈　川　大　学
日本常民文化研究所　**非文字資料研究センター**
Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University
〒221-8686　横浜市神奈川区六角橋3-27-1
■Tel.045-481-5661　■Fax.045-491-0659　■URL http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/